

---

# ガジェイレル-Both-

皆麻 兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガジエイレル - Both -

### 【Zコード】

Z7353P

### 【作者名】

皆麻 兎

### 【あらすじ】

”ガジエイレル” それは、”世界の心”を意味する生物の総称。

世界を創り上げた”星の意思”は、自らが創った”ガジエイレル”を二分し、最終兵器の鍵という宿命を持たせた。

その一人が、剣や魔法の存在する世界”レジエンティラス”で旅をする青年アレン。彼は、自らが持つ宿命を知らず、”イル”という生物か生物かすらわからない”それ”を探して旅をしていった。

そして・・・もう一人が、魔法ではなく科学技術によつて発展し続ける世界”アビスウォクテラ”で生きる女性セリエル。軍人である彼女は、自らが持つ宿命等、”全て”を知つてゐるが故に、日々葛藤に苦しんでいた。

この話は、そんな2人の男女が織り成す物語

## 第1話 祭りの準備（前書き）

この度は、『ガジエイレル・Both』を『』覧戴き、誠にありがとうございました。

作者の皆麻兎と申します。

この作品は、現在このサイトで掲載中＆完結済みである『ガジエイ  
レル・Left・』と『ガジエイレル・Right・』の総集編み  
たいな作品です。

そのため、本文はこれまでのと大して変わりませんが・・・  
もともと、2つで1つの作品だったため、こいつしてまとめてみる事  
にしました。

ただ、諸事情につき、ある程度の所で終了な形になりますので、『ご  
了承ください。』

ただ、元々連載していた作品が「つながるとこんな感じになる」  
という趣旨で書いたのが、この『ガジエイレル・Both・』。

物語の舞台が2つの世界のため、多少ゴッチャになるかもしちゃ  
んが、時系列に沿つてはいるので、その辺りもよろしくお願ひ致し  
ます。

また、補足なのですが・・・

この物語は登場人物の視点が度々変わる作品となっています。

視点が変わる際は文の前後に” ”がついていますので、その辺も  
確認しながら』一読願います。

それでは、お楽しみください。

## 第1話 祭りの準備

山間にある小さな村スト 人々は畑を耕し作物を育てながら、その日その日を生活する。そんなのどかな所に、この物語の主人公であるアレン・カグジエリカは訪れていた。

彼が持つライトグリーンの瞳は、辺りを見回す。

「おい・・・この辺りに、鍛冶屋はないか?」

アレンはその場にいた村民に尋ねる。

「おや、旅人かい!めずらしいねえ・・・」

「・・・」

60は超えていそうな老婆ののんびりとした話し方に、少しイラッとした表情で睨む。

「・・・おお、すまんね。えっと・・・あの森の手前じゃよ・・・」

「・・・わかった。行ってみる」

アレンはそう言った後にこの老婆と別れ、手持ちの剣を磨いてもらうために、鍛冶屋へ急ぐ。

鍛冶屋へ向かう際、彼の視界に入ってきたのは、何かの準備をする村人達であった。

「夜に向けて、しつかりと準備しなきゃね!」

「なんてつたつて、数百年に1度のイベントなんだから・・・」

村人達の会話が聴こえる。

アレンは彼らに対しても見向きもしなかつたが、耳を傾けながら鍛冶屋へ向かう・・・。

「行つてくるねーシシュー!」

自分の姉にそう告げて、黒髪の少女は家を出る。

この物語のヒロインであるラスリア・コンドラフは、義理の姉と共に、この山間にある小さな村ストに暮らしていた。

「こんなにちはー・アミおばさん！！」

「いつもすまないねえー・・・」

「いえいえ！こちらこそ、毎度ご贊賞にしてもらって、すごく感謝しておりますよ！」

ラスリアはこの40代くらいの女性に、一つの紙袋を渡す。

中身は彼女が姉と共に経営している果物屋の商品である。

「では・・・また、夜に！」

そう告げて女性と別れたラスリアは、次の行き先へと歩き始める。

ラスリアと彼女の姉は2人とも孤児で、同じ施設にて育つた。施設を出た後は世界を旅した事もあったが、生活の事を考え、この村に定住することを決意する。しかし、このストはカルリエという国の1領土で、その北端に位置する人口の少ない村ため、生活もあまりゆとりがある訳ではなかった。しかし、それでも本人は満足しているかも知れないが・・・。

「えっと、最初はアミおばさんの家で、次は・・・」

自宅で育てた果物を村の家々に届けるのが、彼女の仕事だ。出かける前に書いたメモを読みながら、次の行き先を探す。

「次は・・・鍛冶屋のグロスイおじさんの家ね！」

「邪魔するぞ」

鍛冶屋の前に到着したアレンは、戸をノックした後に中へ入る。

「ん・・・？ああ・・・客か・・・」

アレンよりも低い声で咳く鍛冶屋の男は、面倒くさそうな表情をしていた。

「剣を少し・・・磨いてくれないか?」

「・・・へいへい」

鍛冶屋の旦那であるグロスイという男は、アレンから剣を受け取る出来るだけ早く終わらせてほしいんだが・・・大丈夫か?」「早めにねえ・・・。でも、今日は祭りの日だから、最低でも明日以降になるぜ?」

「・・・祭り・・・?」

不思議そうな表情をしながら、彼は鍛冶屋の旦那を見る。

「今夜は確か・・・“星降りの夜”・・・だったかな?数百年に1度だけ、空に浮かぶ星の光が地上に落ちてくるのが今夜らしくてな。これは星命学を主とする、ライトリニア教の教えの一部で・・・」

「そんな事はどうでもいいから、聞かれた事だけに答える」鍛冶屋の話に飽きたのか、ため息をつきながらアレンは咳く。  
「・・・・つたく、いちいち注文の多い旅人だなあ・・・」  
ブツクサ咳きながら、鍛冶屋の旦那は剣を磨き始めた。

コンコンコン

アレン達2人の目の前にある刃をノックする音が聞こえる。

「誰だ?」

「あ・・・。グロスイさん!私です・・・ラスリアです!」

鍛冶屋の旦那が問うと、戸の先から女性の声が聞こえてくる。話の途中で割り込まれるのを嫌うアレンは、寡黙な美青年とは思えないようなしかめつ面をする。

「おお、ラスリアちゃんかい。入つていいぞ・・・」

戸に向かって声を張り上げていたグロスイの口調が、明らかに自分と会話していた時と異なっていた。

それに気がついたアレンは、余計にイラッとする。

「こんにちは、グロスイおじさん！・・・約束の果物、届けに来ました」

戸から中に入ってきたこの黒髪の少女・・・ラスリアは笑顔で鍛冶屋の旦那の方を向く。

「・・・・・っ！？！」

彼女を見た途端、一瞬だけアレンの頭が痛む。

なんなんだ、この女は・・・・・！？

彼は異質なモノを見るような表情かおで、ラスリアを見る。

しかし、これがアレンとラスリアの運命的な出会いだという事を、この時は2人とも気がついていないのであつた。

## 第1話 祭りの準備（後書き）

「意見・感想をお待ちしています

## 第2話 “星降り”の夜に

突如中に入ってきた少女ラスリアを見たアレンの脳裏には、一瞬だけ何か映像のようなイメージが映し出されていた。

「・・・あら？ お客様・・・？」

アレンの存在に気がついたラスリアは鍛冶屋の旦那に問う。

「ああ・・・。 “今日は祭りの日だから、仕上がりは明日になる” って言ったのに、せつかちなんだよ。この坊ちゃんは・・・」

「ふうーん・・・」

ラスリアはアレンの方に振り向く。

「はじめまして、旅人さん！ ・・・ 今日の宿は決まりましたか？」

「・・・いや・・・」

「じゃあ、帰りがけに私が紹介します・・・ ついでいうより、私の家に来ませんか！？」

そっぽ向いているアレンにかまわず、彼の顔を覗きこむラスリア。

「・・・近いぞ、チビ」

「・・・え・・・？」

その台詞を聞いたラスリアの表情が固まる。

「・・・初対面の男に顔近づけすぎだつて言つてるんだよ、このチビが！！」

「た・・・旅人・・・さん・・・？」

物凄い形相で睨まれたラスリアは鍛冶屋の旦那と一緒にポカーンとしていた。

ギイイイイイ・・・

アレンは戸を開けた後に、チラッと彼らの方を向いて言つた。

「・・・おい、女！！」

「え・・・はい・・・？」

呆然としていたラスリアは、彼の声を聞いて我に返る。

「案内……してくれるんだろ？ 行くぞ……」

前を向いて歩き出したアレンの表情が、普段の無表情に比べると、少し緩んでいた。

2人が外に出ると、すっかり日の入りの時間になっていた。

「……日が沈んだら、始まるのか……？」

「え……？」

「今夜は“星降りの夜”……とか言っていたな。あのおっさんは・

・・・

そう呟いたアレンは、沈む太陽の方角を眺めていた。

銀色の髪を持ち、澄んだ緑色の瞳を持つ旅人。この人は一体

?

ラスリアは彼の瞳を見ながら、そう考えていた。

彼女は予感していたのかもしれない。アレンは自分の運命を大きく変える人物ではないかと・・・。

日は沈み、ストでのお祭りが始まった。

村人は酒を片手に、食事をしながら楽しそうに会話をする。“祭り”といつても、このような小さい村なので、何か特別な儀式をするわけではない。今宵の“星降り”に関しても、観測されそうな時間帯に、皆で見るだけだという。

「……楽しんでますか？」

テーブルに座つて静かに食事をするアレンの目の前に、ラスリアが歩いてきた。

「（）一緒……してもいいですか……？」

「……勝手にしろ……」

「では、お言葉に甘えて……」

そう呟いたラスリアは彼の向かいの席に座る。

2人の間に沈黙が続く。ラスリアはどう話しかければいいか迷っていた。

さつきはからかいすぎたかな・・・？

彼女を見て、ふとそう思ったアレンの重たい口が聞く。

「“イル”・・・って知っているか・・・？」

「え・・・？」

初めて聞く言葉に、ラスリアは食べる手を一寸止める。

「いえ、知らないです・・・。何なんですか・・・？」

彼女の台詞を聞いたアレンは深刻そうな表情をする。

「古代語で、イルは“心”という意味らしい・・・。だが、“心”に形がないように、その形状も全く不明だが・・・」

「・・・それを、あなたは・・・」

「アレンだ」

「あ、えっと・・・。それを探すために、アレンさんは旅をしてい

るのですか・・・？」

「まあな・・・」

ボソッと呟くアレン。

初対面の人間に、なんでこんな事を話しているのだろう・・・？

アレン自身も不思議でたまらなかつた。

しかし、ラスリア（こいつ）を見た時に頭の中に映ったビジョン・

・。あれのせいなのかもな

アレンは考え事をしながら、シチューを口に入れる。2人は互いに黙り込んだまま、祭りの時間が過ぎていく。

「おい！..あれ・..・..！」

村人の一人の叫び声と直後、アレンとラスリアは我に返る。

気がつくと、南の方角から無数の星の光がこちらへ向かつて飛んでいるのが見える。このストという村は、世界地図から見ても割りと北側に位置するため、“星降り”は南方から北上してくるようだ

見えるのだ。

「すごい・・・まるで、流れ星みたい・・・！」

初めて見る光景に、ラスリアは感激していた。

祭りを楽しんでいた村人達は、皆が同じ方角を見ている。

「来る・・・」

「えつ？」

ラスリアの後ろでアレンがボソッと呟いたが、彼女は何を呟いていたのか聞こえていなかつた。

すると、流れ星のように地上へ降り注ぐ星の内、一筋の光が、この村の方へ向かつてくる。

カツ！――

向かつてきした星の光は、村の広場に植えられていた1本の木に当たる、周囲が一瞬だけ眩しくなる。

「きやつ・・・・」

ラスリアやその場にいた全員が瞬時に目を閉じた。

数秒後・・・光が消えたを感じ取ったラスリアは恐る恐る目を開く。彼女の黒い瞳が最初に映し出したのは・・・アレンだつた。本人は、光が当たつた木の方を向いて、床に座り込んでいる。

「アレンさん・・・・？」

何か違和感を感じたラスリアはアレンの名前を呼び、恐る恐るその肩をポンと触る。

えつ・・・・・・！――？

ラスリアは何か熱いものに触れてしまつたような勢いで、アレンの肩から手をどかす。

なんか、得たいの知れないモノに拒絶されたようなラスリアは驚きを隠せない状態で黙り込んでいた。

彼女は、他人には教えていなければ、幼い頃から不思議な能力ちから

を持っていた。一つ目は、生まれつき回復魔法が使えること。二つ目は、右手で何かに触れた時、稀にその触れた人から何かを感じ取れる能力の二つだ。後方の能力は、気まぐれのよう起きるので、あまり便利なモノとはいえない。

- 今まで何度か、他人（人）の「何か」を感じ取って来たけど……こんな風に拒絶されるような反応を見せるなんて、初めてだわ……
- ラスリアは自分の右手を見つめながら、一人考え事をしていると……

「おい……！」

「え……」

気がつくと、自分の目の前にアレンが立っていた。

「祭りの片付けを少しあるから……って、あんたの姉さんが呼びに来てたぞ」

「あ……そっか……」

“星降り”など、祭りのメインイベントが終わった後はいつも、片付けを開始する。しかし、時間帯は既に宵の刻のため、できる範囲で片付けをした後、残りは翌日に行うのが、いつものパターンである。

「はい、わかりました……！じゃあ、私は片付けをしてから帰るので、アレンさんは、私の家に戻っていてください……」

「……そうさせてもらう……」

そう言い残したアレンは、ラスリアの方へ歩いていった。

さつきのは一体、何だったんだろう

不思議でたまらないラスリアは、姉の下へ首をかしげながら歩いていく。

星の光が俺に告げたあの言葉

ラスリアの家に到着し、鍵が開いていないので、アレンは家の外で彼女達を待ちながら考え方をしていた。

彼は見た目で判断すると20歳くらいの青年だが、本人はそれ以前の記憶が全くなかった。そのため、自分はどこで生まれて、なぜ旅を始めたのかすらわからない。ただ一つわかるのは、“イルを必ず見つけなくてはいけない”という事だけ……。

ラスリア……とかいつたか……。それにしても、“黒髪の少女と連れて行け”なんて……。声の主は、俺に何をさせたいのだろうか……？

一人考え方をしながら、アレンは座り込んでいた。

## 第2話 “星降り”の夜に（後書き）

いかがでしたか？

物語を読んでいて、アレンとラスリアは性格がまるで違う事を「」理解いただけたかと思います。

今回の主人公は、割と寡黙な青年のため、ヒロインのラスリアは彼を引っ張っていくような光景が、既に頭の中にイメージされています。

物語の概要は、大分先まで考えているので、少しづつ整理しながら書いていきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

### 第3話 旅立ちのきっかけ

「あら？」

アレンが家の戸の近くで座り込んでから数分後、茶髪の女性がやつてくる。

「あなたは・・・」

「・・・俺は、今晚だけこちらでお世話になる、旅の者だ」  
その茶髪の女性はアレンの方を眺めてきょとんとしていたが、すぐに最初の表情に戻る。

「・・・半ば、うちの義妹いもうとが強制的に・・・つて所かしら？」  
このラスリアの姉らしい女性の台詞に、一瞬ポカーンとしていたが、すぐに我に返つて  
「・・・そんな所かもな・・・」  
と、返した。

「姉さん！」

後ろを振り向くと、ラスリアが見知らぬ男と一緒に歩いてくるのが見えた。

彼女が姉の前まで歩いてくると、その口を開く。

「彼・・・グスタフがうちに用があるからつて一緒に帰つてきたけど・・・どうしたの？」

その台詞を聞いた姉は一瞬黙り込む。

しかし、すぐに自分の方を向いて話し出す。

「ごめんなさいね、旅人さん。あなたを先に寝室にご案内するけど、3人で話があるんで、寝室にいてもらつてもいいかしら？」

「・・・構わないが・・・」

一人だけ仲間はずれなかんじがしたが、アレンは元々、他人の事情にあまり干渉しない性格のため、何を話すのか気になる事はなかつた。

「では、こちらで少し待っていてくださいね！」

ラスリアの姉シシュは、アレンを寝室に案内した後、笑顔で挨拶して部屋を出て行つた。

さて、今後はどう進んでいくべきか

寝室のベッドに座り込み、アレンは手に入れたばかりの世界地図を広げる。

自分が何者すらかもあまりわからないアレンではあつたが、どの場所にどんな国があるかだけは覚えていた。彼自身、なぜ所々で知識があるのかという疑問すら生まれないようだが・・・。

村人がここは「スト」という村だと言つていたが・・・ここか？アレンは世界地図に描かれているクワイーンヴァル大陸の北東の方に目を向ける。

彼がこの村を訪れた一番の理由は、この辺りで“星降り”がよく見えるのが、この場所だつたという事を知つていたからである。

「“未開の地”・・・」

彼は世界地図のど真ん中にある大陸に書かれた文字を読む。

この世界の中心に位置する大陸は、人が住んでいるかすらもわからない未到の地であるため、世界地図上でも、その土地の詳しい地形は描かれていない。この大陸には学者連中がいろんな議論を行い、いろいろな仮説が打ち立てられる。幾人もの冒険者達がこの地を目指したとも言っているが、生きて戻ってきたという話はまるで聞いたことがなかつた。ゆえに、“未開の地”なのである。

おそらく、ここに「イル」があるのかもな

アレンは一人考え事をしながら、世界地図を見つめていた。

「話つて何？シシュ姉さん！」

ラスリア達3人は、居間にある椅子に座る。彼女は何の話をするのか、気になつて仕方がなつた。

姉さんとグスタフが隣同士で座つているつて事は・・・何か、改まつた話なのかな？

彼らの様子を見たラスリアは、内心そんな事を考えていた。

「ラスリア、あのな・・・」

「姉さんの・・・！」

グスタフが内容を話し出そうとした瞬間、ラスリアは彼の言葉を遮る。

「姉さんの口から・・・聞きたいです・・・」

はつきりとした口調で言つたが、内心はとても緊張していた。

数秒程、彼ら3人の中で沈黙が続く。

「えっと・・・あのね、ラスリア・・・」

シシユの重たい口が聞く。

「私達・・・結婚するの

「・・・え・・・！？」

頬を赤らめながら言つシシユ（自分の姉）を見て、ラスリアは呆然とする。

「い・・・いつの間に・・・！？」

自分の姉とのグスタフが仲が良い事は、彼女自身もよく知つていた。

しかし、じつなるとまでは予想だにしていなかつたからだ。

「私達、お互いに両親がいないじゃない・・・？だから、誰に最初に報告するか、一瞬迷つたけど・・・やっぱり、血がつながつていなくても唯一の家族である、ラスリアへ一番最初に報告するのがいいかな・・・と思つて」

「そつかあ・・・おめでとう・・・おめでとう、シシユ姉さん

！！！」

ラスリアは自分の事のようないい顔で喜ぶ。

「喜んで……くれるの……？」

「もちろんよ！」

家族のいない自分達にとって、「新しい家族ができる」という事は、なによりも嬉しいはずである。

でも、そうなると私は……

内心、「自分の居場所がなくなるような」という疑惑が生まれる。

「果物屋（お店）は……どうなるの……？」

素朴に感じた疑問を、彼女は姉達にぶつける。

しかし、その答えはすぐに返ってきた。

「お店は彼も手伝ってくれるので、今まで通り大丈夫よ！」

「……でも……」

言葉を濁すラスリアには一つ不安があった。

彼ら姉妹はこのグスタフを良く知っている。それは良い所も悪い所も……。

彼は同じ村の人間で姉より2歳ほど上だが、実は仕事といえる仕事を全くしていない。親が地主だから、“働く”事を全く経験せずに育つ。そんな男に姉と、この店を任せ事ができるのだろうか？

「グスタフ……本当に……大丈夫なのね……？」

ラスリアはジッと姉の婚約者の方を向く。

結婚には賛成だけど、この人で本当に大丈夫なのかな……？結構、不安……。

内心そう思う彼女に対し、グスタフの口が開く。

「確かに、僕は両親に甘えて、働いた事がない……。でも……少しずつ……少しずつでいいから、仕事を覚えて“自立した大人”になりたいんだ……だから……！」

世間知らずの青年の目は真っ直ぐなかんじがした。

ラスリアとしては、まだ一つ不安があつたが、その眼差しに強い意

思を感じた彼女は、ため息をつきつつも

「・・・義姉をよろしくお願ひします」

と、グスタフに挨拶をした。

姉たちとの話が終わり、部屋を出るラスリア。

「・・・お前は、どうするんだ?」

「わっ!..」

いきなり声をかけられたので、驚いたが、自分の寝室の前でアレンが立っていた。

「・・・話を聞いていたのですか?」

「・・・聞きたかった訳ではないがな・・・」

アレンは静かに答える。

その後、ラスリアはその場で一瞬黙り込む。

「私・・・やりたい事があるんです・・・」

ラスリアは、深刻な表情をしながら話し始める。

「実は私と義姉は孤児だったんです。両親がいない事はあまり寂しくなかつたのですが、私・・・自分の事がよくわからなくて・・・」

「・・・己が・・・?」

不思議そうな表情でアレンは彼女を見つめた。

「実は私、他人が持つていらないような能力を持つていて、今から10年前・・・8歳の時に、自分の持つ能力を自覚しました」

ラスリアの話に、アレンは黙つて聴いている。

「だから、自分が何者なのか、それを知りたくて旅をしたい・・・と考えた事もありました。しかし・・・義理の姉と一緒に始めたこの果物屋と、姉の事を思うと実行に移せなかつた・・・」

その後、アレンの口が開く。

「・・・姉の結婚を機に、旅に出るのか・・・?」

「・・・はい。これも良い機会なのかも・・・というより、行かなければいけない気がするんですけど・・・!」

「・・・・だからか

「・・・・え・・・・?」

ラスリアは、またもや彼の台詞を聞き逃す。

アレンさん・・・時々、ボソッと呟くから、何を言っているのか  
わからないな・・・

内心、そう思う彼女に対し、アレンはため息をついたような表情で  
「・・・一緒に行くか・・・・?」

と、言つてきた。

「え・・・?」

彼のハスキーボイスに、ラスリアはドキッとする。

「あなたと・・・ですか?」

「・・・嫌なら一人で行くことになるが・・・」

それを聞いたラスリアは、一瞬考ひとえる。

・・・驚きの発言がこの男性は多いな・・・。でも、私より長く旅をしている人に着いていく方が、なにかと安心・・・かも?  
彼女なりに一生懸命考えた結果、ツバをゴクリと飲んで口を開く。  
「私も一緒に・・・あなたの旅に、連れて行ってください・・・・・・  
真剣な表情で、ラスリアはアレンに告げた。

この時、彼女はこの銀髪の青年の顔を初めて、真正面から見た。澄んだライトグリーンの瞳だが、左目の下に、不思議な紋章のような形をした痣が存在する。

しかしラスリアは、今はどういうつもりで彼が「自分と一緒に行かないか」と言つてくれたのか、この痣は何なのか・・・本人には訊かない事にした。

「・・・決まりだな

そう呟いたアレンは、すぐさまベッドに寝転ぶ。

「あの・・・・アレンさん・・・?」

呆気に取られたラスリアは恐る恐るアレンに声をかける。

「行くと決まつたら、長居は無用だ。・・・早く寝てさつさと行く

ぞ

と、言って寝てしまった。

「この人……もしかして、かなりせっかちな男性……?!?  
あつという間に寝付いてしまったアレンを見て、ラスリアはため息をつきながら、布団をかぶせる。

翌朝……まだ義姉が寝入っているような時間帯に起きて、支度をするアレンとラスリア。

「姉さん……。いつてくるね……！」

面と向かって挨拶すると泣きそつだつたので、彼女は一枚の手紙を義姉の枕元にソッと置く。

旅の目的を果たしたら、またスト（この村）に戻つてくるから

そう心に誓つたラスリアは、静かに家の戸を開めた。

「……用意はできたか……？」

家を出ると、鍛冶屋から戻つていたアレンが前の方にいる。

「……はい。お待たせしました」

ラスリアはアレンの方を向いて、真剣な表情で頷いた。

「……行くぞ……」

「はい……！」

出会いつてから間もないのに、割りと打ち解けられたのはなぜだろうと考へながら、ラスリアは5年間過ごした村を後にする。

ヴェスペデイラ暦25年

この年に起きた“星降り”は世界中の全ての生き物が目撃していた。彼らが知らぬ違つ世界でも……。

そして、その翌日アレンとラスリアは旅立つたのだった

### 第3話 旅立ちのきっかけ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

この物語の主人公アレンとヒロインであるラスリアのキャラ設定ですが

アレン・・・容姿端麗、冷静沈着。銀色の髪とライトグリーンの瞳を持ち、左目下には紋章のような形の痣を持っている。  
ラスリア・・・見た目は可憐だが、強い意志の持ち主。<sup>キュア</sup>回復魔法の使い手

というのが、掲載開始前の設定。

ラスリアはほとんど変わっていませんが、アレンはこれに「実はどSキャラ」というのを作者の勝手な判断で追加いたしました。笑  
また、次回はもう一人の主人公・セリエルが登場しますので、ご期待戴けると幸いかも！

そんなこんなで、後書きでは物語に関係する事を書いていきたいと考えています！

ですので、今後ともよろしくお願ひいたします。

## 第4話　この世で異質な存在（前書き）

今回は、もう一人の主人公・セリエルが登場します。

## 第4話　この世で異質な存在

「それにしても、凄かつたよなあ・・・昨日の“星降り”！」「軍人達が多く集う食堂の中で、一人の男が感激したような声で話す。「学者連中曰く、文献で書かれていたモノよりも凄かつたとか・・・！」

「落ちてきた星の光によつて、湖が黄金色に輝いたとか・・・！」多くの軍人が昨夜に起きた“星降り”的噂話をする。

そんな会話に黒髪の青年ナチ・フラトネスは、食事をしながら耳を傾けていた。彼はここギルガメシユ連邦の軍人であり、20歳という若さで少尉となつた青年である。しかし、この物語の主人公は彼ではない。

「あ、ナチ少尉！」機嫌いかが？」

「こんにちは。ルナ少尉」

「今日、仕事が終わつたら飲みに行かない？」

「・・・ありがとうございます。でも、自分はお酒弱いんで・・・」

そう言つてすんなり断つたナチは食堂を出て行く。

周囲でヒソヒソ声が聞こえるが、彼自身は全く気にしていない。

“星降り”か

彼は先ほど、食堂で軍人達が話していた内容について考えていた。俺も昨日見たが、文献でしか聞いた事のなかつた“星の光が地上に降り注ぐ”だなんて・・・生まれて初めて見たモノだつたよな・・・

そう考へながら、ナチはバタンと外階段がある方の扉を開けた。

「セリエルさん！・・・もう少しでお昼休みが終わってしまいますよ？」

彼が声を掛けた先には、一人の女性が階段の所に寝そべつっていた。

階段に寝転び銀色の髪を靡かせるこの女性こそ、この物語の主人公であるセリエル・ヒエログリフである。

「・・・寝てます？」

ナチは横からこの仰向けに寝転がっているセリエルの顔を覗きこむ。

「・・・目を閉じているだけど、起きているわ」

彼女の咳きに気がついたナチは、その隣に座る。

「昨晩の“星降り”・・・見ましたか？」

「・・・ええ」

寝転んだまま、セリエルは答える。

「ヴェスペティラ暦・・・じゃなかつた。このヴェスライン暦25年の昨日に“星降り”が起こるのを予測できたなんて、流石はセルエルさん」

「・・・ナチ。あなたまた、星命学の暦と間違えた・・・」

セリエルはクスッと笑いながら起き上がる。

「だって、俺の実家は星命学者一家なんですーだから、ヴェスライン暦（今の暦）よりも、そっちの方が聞き慣れちゃってて・・・」

セリエルの台詞に対し、ナチは口をブクリと膨らませた。

「私が普通の人間ならば・・・貴方みたいな反応が出来たのにね・・・」

セリエルは自分の右目の下に刻まれている紋章のような痣を触りながら呟く。

「“ガジエイレル”・・・“星の心”・・・ですか」

ナチの台詞の後、二人の間に沈黙が起こる。

数秒後、セリエルはスクッと立ち上がる。

「行きましょう、ナチ。上官に怒られるのは『<sup>あのおっさん</sup>』免だしね

「・・・はい！」

深刻な表情をするセリエルの赤紫色の瞳を、ナチは見逃してはいなかつた。

“何も知らない”というのも何かと不便だけど、逆に“何でも知つていい”というのも、考え方よね

自分より4つ年下のナチと歩きながら、セリエルはふと思つ。

彼女はこの世界“アビスウォクテラ”がなぜ、科学による発展を遂げたのか。なぜ、昨日に“星降り”が起こったのか。なぜ、自分の顔には“星の心”という意味を持つ紋章のような痣を生まれついているのか

全てを知つていた。

当然、自分が何者だと言つ事も

「諸君！3日後に催される世界会議で、我がギルガメシュ連邦も参加するが・・・場合によつては、休戦していた敵国アルテミセとの戦争が再開される可能性もある！－なので、日々の訓練をしつかりと行うよ！」

セリエルが「おっさん」呼ばわりしている50代ぐらいの上官が部下達に向かつて叫ぶ。

室内だというのに、相変わらずひるさい男・・・

セリエルはそう考えながら、ため息をつく。

彼女とナチが所属するのは、軍関連施設を管理する“軍事施設課”。それは弾薬や武器倉庫、軍人が宿泊するホテルや利用する病院など、様々である。しかし、これはあくまで“普段”的仕事であり、任務の際は軍人として最前線に送り込まれる・・・。

「もう！なんであつたって、今年は世界会議をギルガメシュ連邦でやるんですかね！？おかげで、俺らの部署はてんてこ舞いじゃないですか！－！」

「・・・つべこげ言わない！ほら、ちゃんと持つの！－！」

セリエルは会議で使う大量の資料を、ナチと2人で運んでいた。

「でもね、ナチ・・・。確かにこれだけ忙しければ、疲れるかもし

れない。でも、“忙しくて疲れる”というのは、人として充実した生活が送れている・・・っていう何よりの証なのよ」

セリエルの呟きに、ナチは少し黙り込んでから答える。

「・・・すみません・・・」

「・・・いや、貴方が誤らなくても・・・」

廊下には2人の足音のみが続く。

「やあー、お一人さん！仕事ははかどっているかい？」

この時、茶髪で眼鏡をかけた、いかにも偉そうな男が彼ら2人の前を通りかかる。否、「待ち伏せしていた」という表現の方が正しいかもしね

「インテリト中尉・・・」

ナチが不味いモノを食べたような表情をする。

「ご機嫌用、麗しきセリエル嬢。・・・今日のお勤めが終わりましたら、僕とお食事などはいかがでしょうか？」

このインテリト中尉は年齢はセリエルと同じ24だけれど、噂では金で今の地位を買ったと言われている、要は“世間のクズ”を代表するような男である。

「・・・それより、そこをどけて戴かないと、通れないのですが・・・」

セリエルは静かに答える。

「・・・これは失礼」<sup>かお</sup>

口をつぐんだような表情をしたインテリト中尉は、そそくさと塞いでいた進路を開ける。

その後、2人は歩き始めたが、セリエルはすぐに立ち止まって、インテリトの方を向いて口を開く。

「時に中尉殿。貴方は星命学のように考古学に関係してくる話は好きですか？」

セリエルの質問を聞いたこのナンパ男は、すぐに答えを出す。

「僕は過去には興味のない性格なんで」<sup>たち</sup>

その後、ナチの視線はセリエルの方へ向く。

「そう言つ愚か者とお付き合いするほど、私は暇ではないので……これにて失礼致します」

ナチが口で「ひゅー」と音を立てながら、2人は歩いていく。

「全く……あのインテリト中尉、絶対下心ありまくりですよ……」

「……そうね」

仕事を終えた後、セリエルとナチはバーでお酒を飲んでいた。

「……否定はしないんですね」

「そうね……最も、恋愛に興味のない私を口説こうだなんて、

100万年早いけれど……」

「……なかなかはつきりと言いますね……」

そう言いながら、ナチはノンアルコールのカクテルを一口飲む。

「私の事を慕つても、幸せになんてなれないのに……」

セリエルはボソッと呟く。

それを見たナチはそのせつなそうな表情にドキッとした。

「他人と違う事に……」

「？」

ナチの呟きで我に返ったセリエルは、彼の方を見る。

「“自分は他人とは違う”っていう事に対して……あまり深刻に考えない方がいいですよ？」

ナチの優しげな声を聴いても、セリエルの表情が緩むことはなかつた。

「でも、私は……普通の人間とは違う“この世で最も異質な存在<sup>モノ</sup>”。そして、違う世界に存在するという自分と瓜二つの人間が何をしようとしているのかを知っているのに、何もできない……そんな自分が情けなくて仕方ないんだ……」

数秒ほど、彼らの間で沈黙が続いたが、ナチはすぐに口を開く。

「他人は他人。自分は自分……。そう言ってくれたのはセリエルさん、あなたでしたよね……？」

「ナチ・・・・」

よく考えてみれば、こんな話をマトモに信じてくれるのは、ナチ（この子）だけ・・・。自分が世界を破滅させる最終兵器の“鍵”である事も、“人ノ子”ではない事も・・・。そう考え始めると、セリエルの胸の内はいくらかすつきりしたのだった。

「今は、俺らができる事を精一杯やつていきましょう！」

ナチが意味深な台詞を述べた後、2人はバーを出て、それぞれ帰宅するのだった

## 第4話 IJの世で異質な存在（後書き）

「J意見・「J感想がありましたらお願いします。」

## 第5話 互いを知つて生まれる謎（前書き）

### 前書き

今回はアレンとラスリアがどう旅をしていくか。そして、レジエン  
ディラスの世界観がわかるような回になつてます！

## 第5話 互いを知つて生まれる謎

“星命学”  
それは、星がどのような仕組みで生ま  
れ、人々の生活にどのような産物をもたらしているのかについて、  
論じられた学問。“惑星衝突の繰り返しが星を生み、星は火・水・  
土・風を創り、そこから生物は産まれた”という文が有名。この学  
問を元として作られた宗教が、ライトリア教なのである

「それをよこせ」

「・・・嫌」

アレンとラスリアは、何かを巡つて睨み合いをしている。

周りにいる人間は何をやつしているのか、ヒソヒソ話をしているが、  
2人とも耳には入つていなかつた。

「揚げ物にかけるソースはたくさんがいいんだ！たくさんが！！」「  
だからって、真っ黒になるくらいとんかつソースをかける必要も

ないでしょう！これつて、塩分の摂り過ぎなの！！！」

2人は揚げ物にかけるソースの量でもめているようだ。

ラスリアがいたストの村を出た彼らは、商業都市レンドに來てい  
た。

レンドに到着後、昼食をとるという目的で食堂に入った2人。アレ  
ンが揚げ物を、ラスリアがパスタを注文して食べようとしたら、彼  
がソースの入れ物の中身がなくなるくらいたっぷり入れ始めた事か  
ら、この抗争が起きた。

全く・・・俺は濃い味が好きなだけだというのに、どうしてかけ  
てはいけないのか・・・

ラスリアに押されて観念したアレンは、フーッとため息をつく。  
だが、この女

揚げ物を口に運びながら、アレンはラスリアと初めて会った時に浮かんだビジョンを思い出していた。

ビジョンといつても写真のような動きのないイメージだが・・・。一つめは、誰かと対話しているビジョン。しかし、それは人ではない「何か」だった。その対象物が何なのかは謎だが、おそらく、何かと対話する能力を持つているという事になる・・・。アレンには時折、謎の声の主が語りかけてくる。そして、多くの助言をしてくれるのだ。それは世界の事や、剣の使い方・・・ただし、彼自身の事は教えてくれないが

すると、窓の外から、何やら不思議な音楽が聴こえてくる。

「おい。・・・あれは一体？」

「あれって・・・ああ、“旅の語り部”の事ですか？」

窓の方を指差すアレンに対し、ラスリアは答える。

「旅の語り部”・・・？」

すると、ラスリアは声を低くして語りだす。

「今、この世界ではライトリア教が主な宗教でしょ？・・・一つの教えが存在すれば、それを認めない人々もいるつて事・・・。つまり、彼らはライトリア教を批判し、違う思想を広める人たちなの・・・」

「・・・では、なぜ楽器を奏てる？」

「・・・それは、私にもよくわからないわ。多分、大きな音を鳴らした方が、皆聞いてくれるとか考えているのでは？」

会話を続けていると、次第に聴こえてきた音が小さくなっていく。まるで、何も知らない生徒と教師のよつたが、“旅の語り部”が去った後、その会話を収まつた。

「宗教の事はともかく・・・今後、どう進むつもりなんですか？」

ラスリアが違う話題を切り出すと、アレンはジッと彼女を睨む。

「アレン・・・さん？」

「・・・ 敬語・・・」

「え？」

「敬語と、その・・・ 「やん」 づけはやめてくれないか・・・」

「・・・ はあ・・・」

ラスリアは呆気にとられた表情になる。

しかし、その台詞がアレンの「照れ隠し」だとわかった彼女は、すぐ

に我に返る。

「・・・ 次は、隣国レアナにある学術都市アテレステンへ行こうと考えている」

「学術都市・・・」

「・・・ どうした?」

学術都市アテレステンの名前を聞いたラスリアが、その言葉に反応して考え込む。

「ちなみに、それは・・・」

「もちろん、イルのためだ。それに、イルがどんなモノにせよ、あの都市にいる学者連中に聞けば、何か掴める可能性が高いと思つてな・・・」

「という事は・・・」

ガサツとラスリアは世界地図を取り出す。

「そこへ行くには、このラプンツェル山脈の山道を抜けなくてはいけないかんじね」

「・・・ ああ。その道中にあるオーブル遺跡も、念のため何か手がかりがないか調べてみるつもりだ」

「そうね・・・」

「・・・ 先ほどの反応は何だつたんだ・・・?」

行き先の話が終わり、食事代を払おうちした時に、アレンはふと考える。

あまり、行きたくない雰囲気をかもし出していたが・・・ 気のせいか?

考え方をしながら会計をすまし、店を出て行こうとした時・・・

「 そこの兄ちゃん！」

後ろから食堂の店長が彼ら2人に声をかけてきた。

「あの・・・何でしようか・・・？」

いきなり声をかけられて驚いたのか、ラスリアは恐る恐る尋ねる。

「いや・・・ね。盗み聞きするつもりはなかつたんだけど、あんた達が行こうとしている“オーブル遺跡”の名前を聞いて思い出したんだ」

「何か知っている事もあるのか・・・？」

店長の言葉に反応したアレンは、その女性の目の前に来て顔を近づけた。

その綺麗な顔立ちのアレンに近づかれて頬を赤らめた食堂の人は、更に話を続ける。

「な・・・なんでも、その遺跡。“遺跡内で死んだ人間が不死者になつていつぱいさまつている”という話を聞いた事があつて、できれば行かない事をオススメするわ・・・」

そう教えてくれた後、すぐに自分の仕事へと戻つていった。

ラスリアがその人にお礼を言つた後、彼らは食堂を後にする。レンドの表通りを歩いていく2人。“商業都市”と呼ばれるだけあって、道を行き交う人の数が多い。品物を売る商人、それを買う街の人間や、旅人

他人との交流をあまり好まないアレンとしては、この人ゴミの中に紛れている事が、最も気楽な事であった。しかし、今はラスリアも一緒になので、独りではないが・・・。

不死者か  
アンデッド

旅をした時期があつたとはいえ、流石にラスリアも不死者を見た事がなかつたので、どんな存在モノなのか想像力を膨らませていた。見た

」とはないけれど、先ほど食堂のお姉さんがその言葉を口にした時、一瞬だけ鳥肌が立つていたのを彼女は感じていた。

とにかく、何か怖いモノなのかな

？

考え事をしながら歩いていたので、2人とも黙つたままだった。黙つて歩き続けてきたので、目標のラプンツェル山脈の麓に、割と早く到着する事ができた。

「日が暮れてきたな・・・夜の登山は、危ない。・・・今日はここで野宿とするか・・・」

「そうです・・・じゃなかつた！・・・そうね・・・」

“敬語は禁止”とアレンに言われたのを思い出したラスリアは、すぐ訂正をした。

それから数時間後・・・辺りは暗くなり、風も出てきた。彼らは山の麓にある岩石だらけの場所で野宿をする事になった。食事を終わらせ、焚き火の前でアレンは剣を磨き、ラスリアはただただ炎を見つめていた。

「そういえば・・・」

アレンが手を動かしながら口を開く。

「学術都市アテレステンに行くと、何かまずい事でもあるのか・・・？」

「えつ・・・」

ラスリアはドキッとした。

動搖を隠して接していたつもりだけれど・・・バレていたのかな・

・  
その場で考えるラスリアだったが、アレンの無表情でも真っ直ぐな瞳<sup>め</sup>を直視できなかつた。

彼女は、自分が「特別な人間」である事はわかっていた。自分の出生のために、学術都市アテレステンで誘拐されそうになつたのだから。しかし、つらい目に遭つた事などおぐびに出さず、アレンに答

える。

「いえ。アテレステンは、一度訪れた事があつて……ただでさえ地理に疎いのに、いきなり知っている街の名前が出てきたから……少しビックリしただけなの」

そう答えたラスリアの顔をジッと見るアレン。

「・・・そうか・・・」

納得をしたのか、アレンは焚き火に背を向けて寝転び始める。

「明日も早い・・・。そろそろ寝るぞ・・・」

そう呟いて、あっという間に寝付いてしまった。

すぐさま眠りについたアレンを見て、ラスリアは思つた。

アレン（この人）を信用していない訳ではない・・・。でも、自分の事で彼を巻き込みたくないから・・・。自分の事は、しばらく黙つておいた方が良さそうね

そう考えながら、ラスリアも焚き火の灯りを消し、横になつて眠りについた。アレンが探す「イル」がどんなものかと考えながら

## 第5話 互いを知つて生まれる謎（後書き）

いかがでしたか。

話の中で”濃い味”か”薄い味”でアレンとラスリアがもめていましたが、皆さんはどうち派ですかね？

次回はセリエル編初の、前編・後編構成になります。どんな登場人物が現れるかは、次回以降のお楽しみ引き続き、ご意見・ご感想をお待ちしております！

## 第6話 “星の意志”と古代遺跡へ前編へ（前書き）

第2話をお読みいただいた方はおわかりかと思いますが、セイエル編の場合、主人公セリエルとナチの2つの視点で物語を進めていきます。

## 第6話 “星の意志”と古代遺跡く前編く

ギルガメシュ連邦 それは、アビスウォクテラに存在する国の一つで軍事国家。この國の他に、“ムーン・ゼブラ”・“ケルナス共和国”といった國々がたくさん存在し、領地などを巡つて各地で戦争を繰り返している。人の心に“野心”的な2文字がなくならない限り、この世界における戦争は幕を閉じることはないだろう。しかし、後に奇跡は起こるが

「それでは、今回の任務を伝える」  
その言葉を皮切りに、セリエルとナチの上司はこの日の任務内容を伝える。

軍事國家であるギルガメシュ連邦。軍の階級は少尉 中尉 大尉と順を追つて人は出世をし、“少将”までなると、部下達を率いる立場にある。一応24歳であるセリエルは、軍人としての実力で言えば中尉くらいに当たるのに、彼女は未だに少尉の地位にある。なぜ、その状況に甘んじているのかには、訳がある。

「セリエルさんは、”出世欲”ってモノが相当欠けていますよね…」

上司の命令でとある場所へ向かう途中、ナチが彼女に話しかける。  
「出世ねえ・・・・まあ、私はあなたと違つて、やりたくて軍人をやつしている訳ではないし、正直なところ、出世に興味ないのは本当よね」

歩きながらセリエルは答える。

「それに、上に立つて人を動かすより、いつもやつて自分から動ける方が、私の性に合つているし」

「なるほど…でも、理由はそれだけじゃなさそうですが…」

「…何が言いたいの?」

そう呟くセリエルがジロリとナチを睨む。

「…何もないです…」

その表情に圧倒されたナチは、気まずそうな表情で縮こまつた。

今回、彼ら2人に与えられた任務は連邦が抱える学者達の護衛。この学者達が向かう先は、近年発見されたばかりの古代遺跡。ギルガメシュ連邦では、新しい遺跡など古代遺産が発見された場合は、軍の監視下の元で調査を行つていて。そうして調査を行い、いつの時代のモノか、危険性がないか等が確認されれば、“世界遺産”として一般人に公開される仕組みとなつていて。

この古代遺跡に対する扱いは、どの国も共通であり、“世界遺産”に限つては、万国共通となつていて。

「どうやら、遺跡に到着したようだ。行くぞ…！」

「はっ」

司令部からトラックで移動し、古代遺跡が存在する森の前まで到達したセリエル達。

この場にいたのは、セリエル達を含む軍人が5人。学者は助手を含めて4人。その内の一人は、星命学者であるナチの父親の知り合いという具合だ。

「…ご無沙汰しています、ジェンドさん」

「やあ、ナチ君。大きくなつたねえ…」

数年ぶりに会つたこの学者と軍人の他愛もない会話を、セリエルは横目で聽いていた。

そして歩く事1時間、森の中に存在する古代遺跡に到達する。上司であるガンツ大尉の指揮の下、遺跡外部に何か危険なモノが存在しないか確認をし、一行は遺跡の内部調査に乗り出す。

「時にナチ君。…君はこの遺跡について、どう思う?」

遺跡内部を進み始めて数分後、ジェンドは真剣な表情に一変してナチに話しかける。

空気が変わった事を察したナチは、自身も真剣な表情をしながら辺りを見回す。

「口では表現しづらいのですが・・・なんか、神聖さと禍々しさが五分五分・・・という雰囲気がします。だから・・・ここは死者を奉る神殿かと思っています」

「なるほど・・・君はそう解釈したか・・・」

「・・・ジョンドさんは、どうお考えですか?」

ナチは低めの声で彼に尋ねる。

「わたしは・・・」

「・・・！」

ジョンドが自分の考えを話そうとした瞬間、セリエルが突然その場に立ち止まる。

「セリエルさん・・・！」

自身の右手で頭を抱え、その場で黙り込むセリエル。

「どうした? 何かあつたのか・・・！」

「ガンツ大尉・・・。セリエル少尉が・・・！」

セリエルの表情がつらそうなのに気がついたナチは、ガンツ大尉にその旨を伝えようとする。しかし・・・

「大丈夫です・・・。少し・・・眩暈がしただけなので・・・」

ナチの肩を掴み、苦笑いをしながらセリエルは咳く。

「・・・体調管理はしつかりしとけよ・・・」

「はっ・・・」

一言述べたガンツ大尉は、元の配置に戻つて他の学者と話し始める。

「・・・本当に大丈夫ですか?」

「ええ、平気・・・。しそつちゅうある事だしね・・・」

やつと眩暈を感じなくなつたセリエルは、何事もなかつたかのように歩き始める。

「・・・また何か“見えた”のですか・・・?」

「ええ・・・。後でまた話すわ・・・」

ナチが彼女の耳元でコソッと囁いたのに対し、セリエルも小声で話して頷いた。

セリエルには時折、フラッシュバックのような感覚で、ビジョンみたいな映像が頭の中に入ってくる。それを何度も見る内に、自分にそれを伝えているのが“星の意志”である事を悟ったのだ。

ビジョンに出てきた8つの人影・・・そして、独特な雰囲気を感じるこいつらは確かに

遺跡内部を進みながら、セリエルは頭に浮かんだビジョンについて考えていた。

「ガンツ大尉。・・・どうやら、ここがこの遺跡の中心部でしょう。・・・」

学者の一人が、ガンツ大尉に声をかける。

「そうですか。では・・・」

大尉はセリエル達の方を向いて口を開く。

「それでは、この場所を拠点に調査を開始する！！各自、学者達の後ろに待機し、危険物がないか辺りに気を配れ！それと、この場を出て他へ移動する際は、わたしに許可をとるように！！以上だ・・・！」

ガンツ大尉の一言の後、学者達は調査を開始し、セリエル達軍人も自分達の配置につく。

「それでは・・・ナチ少尉と・・・こちらは？」

「・・・セリエル・ヒエログリフ少尉です」

ジェンドがセリエルの方に視線を向けると、本人は自分の名前を名乗つた。

「では、セリエル少尉。・・・よろしくお願ひ致します」

「お任せください」

穏やかな表情で挨拶してきたジェンドを見て、少しは信頼のできる学者であると感じたセリエルであった。

“星の意志が伝えるビジョン”・・・か・・・

学者達による遺跡調査が開始され、自分の知り合いでもあるジョン博士の護衛兼助手を担当する事になったナチは、横にいるセリエルの持つ能力について考えていた。

彼女の話は、現実的にはありえない内容だけれど・・・割とすんなり理解できたのは、父親の影響かもな

彼の両親は2人とも学者で、星命学を中心とする考古学の権威であった。「この世界が別次元にある世界と、元々は一つだった」「我々人類が知りえない“星の文明”が存在するかもしれない」といった神話並みの話も、幼少時からたくさん聴かされてきた。おそらく家庭の経済事情がなければ、彼は学者としての人生を両親のように歩んでいたのかもしれない。

「“8人の異端者”・・・?」

考え方をしていたナチの側で、ジョン博士がポツリと呟く。

「ジョンドさん! 何か見つけましたか・・・?」

ナチはジョンドの隣へ移動し、それに気がついたセリエルも彼らの側へ赴く。

「ああ、この壁に書かれている文を解読してみたのだが・・・」

「“8人の異端者”・・・って書かれているのですか・・・?」

セリエルが興味深そうな表情かおで壁に描かれた文を眺める。

“8人の異端者”って確か

ナチにとってその言葉は、どこかで聞いたことのあるモノであった。それが何かとまでは思い出せなかつたが・・・

“8人の異端者、その巨大な力にて世界を破滅へと導かんとする

”・・・”

「セリエルさん・・・?」

気がつくと、セリエルは虚ろな表情で謎の言葉を発していた。

「セリエル少尉・・・貴女もなかなかの知識人のようですね・・・」  
ジョンドは学者しか知りえない一文を知っていたセリエルに感心する。

「・・・何か・・・？」

彼の台詞の直後、いつもの表情に戻ったセリエルは、何事もなかつたような雰囲氣でジョンドを見た。

この別人のような表情をして謎の言葉を発する・・・。これも彼女が持つ“能力”なのか・・・？

このような状況を過去にも日にしたことがあったナチは、セリエルの能力に首をかしげる。

「・・・ナチ君？」

「あ・・・すみません！ジョンドさん！！」

ボンヤリしていた彼は、目の前でジョンド博士が声をかけてくれているのに気がついていなかつた。

我に返つたナチは、あたふたした表情をする。それを見たセリエルは、後ろでクスッと笑っていたのだった。

「ジョンド博士！――こちらに来てもらえないでしょつか！？」

「ああ・・・今行く・・・！」

後ろの方から、違う学者の声が聞こえ、ジョンド博士はその呼び出しに応じる。

「・・・何か見つけたのですかね？」

「さあ・・・。とりあえず、私達も博士についていきましょう！」

ナチとセリエルはその会話の後、ジョンド博士と一緒に、声の聴こえた方へ歩き出す。

## 第6話 “星の意志”と古代遺跡へ前編へ（後書き）

いかがでしたか。

おそらく”説明的な文章が多い…”と感じられるかと思いますが、この作品の世界観や人物については、やはりちゃんと説明を加えないとわかりづらいので、このように書いています。

なので、多少はご了承ください。

第1話の後書きで”この作品は同タイトルの”Left”とつながりがある”と書きましたが、今回は両作品の主人公であるアレンとセリエルの設定について。

物語がまだ序盤なので、あまりネタバレ的な事は書けませんが、まづ言える事は、「一方が持つていらないモノをもう一方が持っている」です。

例えば、アレンには過去の記憶がないのに対し、セリエルは自分がどのようにして産まれたのかも知っています。また、主人公を男と女にしたのも、そういうた考え方の下で決定しました。容姿も”銀髪で肩につくかつかないかくらいの長さ”は共通ですが、瞳の色や”世界の心”を意味する癌がある場所がアレンが左目下、セリエルは右目下といった具合です。

あまり長すぎるのもあれなので、今後は後書きにて物語やキャラ設定について隨時書いていこうかと思っていますので、よろしくお願ひいたします。

ご意見・ご感想もお待ちしています！

## 第7話 “星の意思”と古代遺跡<sub>く後編></sub>

セリエルとナチは、ジョンド博士と共に声の聽こえた方へと歩き出して行く。セリエルは歩いて行く内に、妙な悪寒を感じていた。

「ジョンド博士！これを見てください」

セリエル達の視界に入ってきたのは、祭壇らしき台の下に出てきた隠し階段。

「・・・どこかに触ったのか・・・？」

「あ・・・はい。手探りで軽く触っていたら、台座を形作る石が引つ込むような仕掛けになっていたみたいで・・・」

学者とジョンド博士が話している一方で、セリエル達や他の軍人は隠し階段に釘付けとなっていた。

遺跡内の造りから言うと、これはヴェスペデイラ暦（＝かなり昔の暦）の時代に生きていた人間たちが造ったモノ・・・。“8人の異端者”の文字があつたとすると、もしや

嫌な予感のしたセリエルは、ナチの隣に寄つて小さな声で呟く。

「この先・・・進まない方がいいかもしれない・・・」

「・・・・どうですか？」

「それは・・・・」

その時、セリエルは一瞬考える。

この“8人の異端者”とは、かつてヴェルペデイラ暦だった頃、世界を滅ぼそうとした者たちを指す。彼らは皆、異民族で8人で行動していた事から、その名前がつけられた。しかも、過去の歴史で普通の人間達に迫害され、忌み嫌われていた者が多かつたため、人類に対する恨みの念は相当なモノであった。そしてヴェルペデイラ暦500年、ついに全人類を敵に回して大戦争を引き起こす。彼らは1人1人が強力で、その圧倒的な力によつて大地は裂かれ、多くの生き物が死に絶えた。

しかし、それも長くは続かなかつた

“世界の滅亡”を予感した“星の意思”と人類が最後の力を振り絞り、この戦争を終結する事ができた。

ギルガメシュ連邦の歴史書には書かれていないために一般人は知らないが、敗北をした彼らは、時間の流れない特殊空間にて幽閉されたという事実をセリエルは知っていたのであつた。

「よし！！この先が安全だらうと危険であろうと、調査しなくては何もわからない！！よつて、今からこの隠し階段の先の調査を開始する！！皆、心して任務に当れ！！！」

「はっ！！」

ガンツ大尉の指示にセリエル達は敬礼をする。

そして、念のため軍人を一人その場に残し、隠し階段の奥へと進む一行。降りた先の通路は彼らの想像より狭く、軍人と学者の合わせて8人で何とか入れるくらいの広さだった。

「扉を・・・開けます・・・！」

身構えながら、一人の軍人が目の前にある扉に触れる。

ギギギギギギギギ・・・・

硬そうな扉の割りには、成人男性1人の力で開けることができた事に対して、セリエルとナチは2人とも違和感を感じていた。

「これは・・・！」

ナチが呆気に取られたような表情で、視線の先を見つめる。しかし、驚いているのは彼だけではない。

扉の先にあつたのは、底が見えないくらいの穴・・・そして、下からは紫色の光の渦が見える。

「もしや・・・“時止まりの空間”・・・？」<sup>スタイルフィールド</sup>

ジェンド博士がボソッと呟く。

その表情が青ざめていくのに気がついたナチは、ジェンド博士に声をかける。

「ジョンドさん……すい汗ですよ……！」大丈夫ですか……！？」

「“時止まりの空間”だつて……！？」

他の学者達がざわつく。

何の事だかわからぬ軍人側は、そんな彼らの様子を見て首をかしげる。

これが“時止まりの空間”なのね

周囲がざわついている中、セリエルは独り深刻な表情で考え事をしていた。

それから2時間後、遺跡調査を終えた一行は連邦司令部に戻り、各自解散をした。任務が終了し、通常業務も終えたセリエルとナチはジョンド博士の研究室へ向かっていた。

「ジョンド博士、あれ以降ずっと深刻そうな表情をしていた。……

それだけ、あそこにあつたものがすごかつたんだろうな……」「そうね……だから博士はあの場所を“一般公開できない危険のある場所”と認定したのでしょうかね……」

歩きながら会話をする2人。

私には“人間の気持ち”をあまり理解はできないが……おそらく、ナチ（この子）はあの空間が何だったのかという好奇心よりも、博士の方が心配なのがちがう。

ナチの後姿を見ながら、ラスリアはふとそう考へる。

「失礼します、ジョンド博士！俺です……ナチ・フラトネスです」

博士の研究室の扉の前で、ナチはノックをしながら言つ。

「……おお、ナチ君か……！」

扉越しで声が聞こえた後、パタパタと音が聞こえ、中からジョンド博士が顔を出す。

その後、ジョンド博士の研究室に入らせてもらひナチとセリエル。

お茶を飲んで一息ついた後、ナチは口を開く。

「ジョンドさん……あの時おっしゃつていた“ストイムフィー

ルド”って、何の事なんですか……？」

その問いかけに対し、一瞬驚くが、ため息をついてから口を開く。  
「本当は国家機密の一部であるが、仕方がない……。君は私が世話になつてゐる友人の息子だからね……」

2人の会話に、黙つて耳を傾けるセリエル。

すぐに話を開始するかと思ひきや、博士はセリエルの方をチラツと見る。

この視線はおそらく

「私は失礼しますね」

セリエルはお辞儀をした後、すぐさま研究室から出た。

無論、そのまま居座つて彼の話を聞く事も可能であったが、セリエルは“ストイムフィールド”が何の事だと理解していたため、聞く必要もなかつた。

まあ、“国家機密”的情報のため、赤の他人には知られたくない雰囲気を博士の視線から感じたしね……

そう考えながら、セリエルはジェンド博士の研究室を後にする。

「では、”ストイムフィールド”について話そう……」

セリエルが研究室を出て行つた後、話し始めようとするジェンド博士に対し、ナチもしっかりと聞く体勢を取る。

「ナチ君。君ならば“8人の異端者”が何か……知つているかね？」

「あ……はい。この世界がまだ本来の姿だつた頃、世界を破滅させようとした、異民族達の集まり……ですよね？」

「そうだ」

博士はゆつくりと頷ぐ。

「彼らは「星の意思」と、最後の力を振り絞つた人類によつて敗北を余儀なくされた”……ここまでは、一般人も知つてゐる史実。

しかし・・・

「しかし・・・？」

「（）から先は、一般的に公開されていないのだが・・・。奴らに勝つたとはいえ、異端者たちを完全に倒したわけではなかつた・・・。“完全に滅ぼす”ことが叶わなかつた人類は、その優れた科学力にて「時の牢獄」を作り上げた・・・

「それが・・・“ストイムフィールド”・・・ですか？」

ナチは恐る恐るジョン博士に尋ねる。

「ああ。（）の“ストイムフィールド”とは、その中では全く時間が進まないようになっている。そういう空間に“8人の異端者”を閉じ込める事で封印し、2度と出て来れないようにしたのだ・・・」

“時の止まつた空間”・・・当時の人々に、そこまでの科学技術があつただなんて・・・

ナチは驚きと戸惑いの表情かおでいっぱいだつた。

「では、今日調査したあの遺跡は・・・・・」

「おそらく、ストイムフィールドを封印していた場所なのだろう・・・

・。ただ、こうも簡単に中に入れた事だけが腑に落ちないが・・・・

その台詞を聞いた瞬間、ナチは身を乗り出して話し出す。

「やっぱり、ジェンドさんもそう思われていたんですね・・・・・！」

？」

急に身を乗り出してきたので、驚いた博士は一瞬オドオドしていたが、すぐに元の表情に戻る。

「・・・・・“ストイムフィールド”を作り出すくらいの科学力を昔の人間（彼ら）は持つていた・・・。例えその時から数百年経つてしようと、そう簡単に中へ入れるのはおかしいからねえ・・・・・」  
その場で沈黙が続く。

ナチは何から話しあせばいいかわからなくなりつつあつたが、ふと思いついた事を口に出す。

「正確には・・・その事に気がついたの、俺ではないんです・・・・・

「ほう……」

恥ずかしそうな表情<sup>かお</sup>で離すナチに、興味深そうな表情<sup>かお</sup>をするジェン博士。

「セリエルさん……俺と一緒に貴方を護衛していた女性の少尉が言つていたんです。“こうも簡単に入れるのはおかしい”と……」

「……あの銀髪の女性が……？」

ナチの台詞を聞いて、博士は呆気に取られる。

「ナチ君」

「あ……はい！なんですか……？」

我に返つた博士は、ナチに真剣な表情<sup>かお</sup>で話しかける。

「セリエル少尉……といったかね。彼女の右田下にあるあの痣……」

「……あれはもしや、生まれつき持つものではないかね？」

「あ、はい。そうで……」

頷こうとした瞬間、「しまった！」と気まずいような顔をするナチ。そつだ……これは、セリエルさんから内緒にしておくよう言われていたんだ……やばい……！

言つてはいけない事を言つてしまつたナチは何て言えば良いかわからなくなる。それを見かねたジェンド博士は、ため息をついた後に口を開く。

「大丈夫、君から聞いたとは本人には言わないよ。ただ、あの痣が気になつていたからね……」

「……もしかして、ジョンドさんはあの痣が何なのか知つているのですか……？」

再び、彼らの間に沈黙が流れる。

「これはわたしの直感と憶測だが……」

「え……？」

いきなり話出したので、ナチはドキッとした。

「セリエル少尉……だったね。彼女には今後、何かとつもな

い危険が迫つてくるかもしれない・・・。そんな気がするのだよ・・・

・

ナチはこのジョンド博士が言う直感による憶測を聞いた事があった。そして、過去においてその憶測が的中した事もあったので、冗談とは全く思っていないようだ。

「・・・はい」

低い声でナチは頷く。

「だから、もし彼女が君にとつて大切な人ならば・・・わたしみたいな老いぼれの直感だけれど、気にかけてやってくれんかね・・・

・?

“とてつもない危機”か

夜空に浮かぶ満点の星を眺めながら、ナチは考え方をしていた。ジョンド博士の憶測は、学者的にちゃんと考えて言う言葉なので外れないとは思われるが、必ずしも当るというわけではない。ナチはひたすら、この平和な生活が続く事を祈りながら、帰宅していく。

しかし、後にセリエルには重大な危機が訪れ、ナチ自身もそれに巻き込まれるとは、この時の彼は当然知るよしもなかつたのだった

## 第7話 “星の意思”と古代遺跡へ後編へ（後書き）

いかがでしたか。

ちなみに、内部調査を行った遺跡はエジプトのペルミドの中のようないmageを持つて書いていました！

書いていて思った事は、「人間の直感って馬鹿にはできないな」という事です。

さて、次回はアレン編でのスタートとなります。

アレン編での主要キャラが新たに登場する回なりそう・・・？

キーワードは「悪魔」。

・・・次回もお楽しみ

ご意見・ご感想をお待ちしています！

## 第8話 一風変わった2人組＜前編＞（前書き）

この回から主要登場人物であるイブールとミュルザが登場します

## 第8話 一風変わった2人組＜前編＞

ラプンツェル山の麓で一夜を明かしたアレンとラスリアは、翌日山を登り始める。

「それにしても、今日が快晴で良かつたよねー雨だったら、足元滑るだろうし・・・」

傾斜の激しい山道を通りながら、ラスリアは言つ。

・・・そう言つてゐる割には、スイスイ進むな  
アレン自身も体力にはいくらか自信があつたが、ラスリアが意外と持久力を持つてゐるのに彼は驚いていた。

「オーブル遺跡・・・もうそろそろ見えるかな・・・？」

「ああ。おそらく・・・」

「こんなに高さのある場所に・・・じつして、遺跡を造つたのかしら・・・？」

歩きながらラスリアはポツリと呟く。

「・・・さあな。ただ、人間は神に近づきたい余りに、神の世界に最も近い場所・・・要は高さのある場所に作りたがるという話なら、どこかで聞いた事がある・・・」

「ふうーん・・・」

ラスリアが頷いてゐると、後ろから聞こえてくる歩く音が消えた。

「・・・・・・・っ！－！？」

「・・・アレン・・・！？」

その場に立ち止まつたアレンは、眩暈を感じたかのように頭を抱える。

『そう。人は神に近づけば近づく程、後にその翼をもがれる。それがどれだけ愚かな事か身を持つて教えてやるのが、お前の役目・・・』

アレンの頭の中に響いてきた声はそのように述べる。

「翼をもがれる」・・・・・「身を持つて教えてやる」・・・・・。一体、どういう事なんだ？

頭がスッと軽くなつたアレンは、声の主が述べた言葉に疑問を持ち始める。しかし、なぜか「それ」を否定する気持ちにはなれなかつたのだった。

「アレン！・・・・・大丈夫？」

隣でラスリアが心配そうな表情かおで彼の顔を覗き込んでいた。

「・・・・大丈夫だ」

ラスリアの肩に一瞬だけ寄りかかつた後、すぐにその手を離した。いつもの表情に戻つたアレンは、進行方向に身体をむきなおす。「・・・・オーブル遺跡に、そろそろ到着しそうだな」

山の中にあるオーブル遺跡の中は、土煙が立ちこみ、あまり空気のきれいな場所とはいえなかつた。至る所に、不思議な紋様の描かれた壁画がビックシリと存在する。魔物の気配は感じられなかつたが、逆に静かすぎて怖い雰囲気も出でている。

「魔物の姿がこれだけないというのも、不思議なモノだな・・・・」「確かに・・・・。当然、この遺跡は国の管理下に入つていないから誰かが魔物退治に来ているとは思えないし・・・・変なの」

辺りを見回しながら、2人は魔物に全く遭遇しない事を不思議がつていた。

「・・・・そういうえば、ずっと気になつていたんだけど・・・・

「どうした」

アレンがラスリアの方を振り向くと、彼女はお茶を濁したような表情かおをする。

「・・・・なんだ。早く答えろ」

「う・・・うん・・・」

ツバをゴクリと飲み込んだラスリアは、その口を開く。

「あなたの左田の舌にある痣・・・。それ、どうしたの・・・?」

「痣・・・?」

その言葉を聞いたアレンはきょとんとしていた。

「痣・・・あつたのか?俺に」

「ええ・・・。もしかして、鏡とか見たことないの・・・?」

そういえば、自分の顔を鏡で見たことはないな

自我がはつきりしてから今まで、アレンは自分の姿をまじまじと見たことがなかった。だから、痣があろうとも、何も気に留めてはいなかつた。

「ほら・・・これ!」

ラスリアが自分で持っていた手鏡をアレンに手渡す。

「・・・本当に、左田の下にある・・・」

手鏡を除いたアレンは、左田の下に不自然な形をした痣を自分が持つている事を知る。

「・・・・・!」

その後、アレンはバツと辺りを見回す。

「ア・・・アレン!?」

いきなり動き始めた事に驚いたラスリアは、眼を丸くしてアレンを見る。

「・・・誰か来る・・・」

アレンがそう呟いてから1秒経過したぐらいに、遠くから足音が聴こえる。

気がつくと、自分の服の裾をラスリアが掴んでいた。

「・・・どうした」

彼女の方を向くと、全身に鳥肌を立てて震えていた。

「『めん・・・。でも、何か不得体の知れないモノの気配を感じるか

ら・・・どうすればいいかわからないの・・・

軽く怯えた表情をするラスリア。

それにドキッとしながらも、アレンは足音の聽こえる方角に剣を向ける。

カツンカツンカツン・・・

ギィイイイイン!!!!!!

柱の影から誰かが現れた直後、アレンは瞬時に踏み込む。彼の剣が何かとぶつかつて響く音。

「・・・あつぶねえなあ・・・・!」

気がつくと、目の前にはアレンと同じくらいの背丈で濃い紫色の髪をした男は立っていた。その左腕で、アレンの剣を受け止めている。

「アレン! ! ?」

彼の元へ追いついたラスリアが2人の姿を見つける。

「・・・ってあれ?」

「・・・どうやら、魔物ではなさそうだな・・・」

剣を鞘に戻しながら、アレンはこの紫色の髪をした男を睨みつける。片腕で俺の剣を受け止めたのに、かすり傷一つすらつかなかつた・・・。こいつは一体・・・?

突然現れた男に不信感を抱くアレン。

「ミコルザ! ! ビニー? ?」

遠くから、少し甲高い声が聴こえてくる。

その声を聴いた瞬間にアレンは身構えたが、それとほぼ同時に男は彼を睨みつける。

「・・・あ、いたいた! ! 全く、一人で勝手に進まないでくれる?」

そう呟きながら出てきたのは、金髪碧眼で髪が肩につくか否かぐらの長さを持つ女性だった。

「あれ？ あんたたち・・・」

呆然としていたアレンとラスリアだが、すぐに我に返る。

「あ・・・『めんなさい』もしかして・・・』の男性の連れの方・・・ですか？」

「・・・ええ。 そうよ」

ラスリアの問いに、この女性は笑顔で答えた。

「ちょっと、ミユルザ！ またあんたから喧嘩しけたんでしょ！？」

そう声を張り上げた直後、『』のミユルザといつ男の背中を思いつきり叩く。

「痛つてえ！！！ 何するんだよ、イブール姐さん！・・・」

背中を叩かれて、痛がる男を見たラスリアが慌てる。

「いえ！！ 先に手を出したのは、アレンの方です！・・・ 多分」

その台詞を聞いて力チンときたアレン。

「・・・ 多分とはなんだ。 多分とは・・・」

「あ・・・いや・・・。 なんていうか、2人とも動きが早すぎたから、どちらが悪いかつていうのはわからなくて・・・」

そんな2人のやり取りを、イブールとミユルザは眺めていた。

「なんにせよ、先ほど『めんなさい』ね！！ 私はイブール・エンヴィ。 遺跡発掘が好きなトレジャーハンターと言った所かしら？」

「あ・・・。 私はラスリア・コンドラフです・・・。 それと・・・」

氣まずそうな表情でラスリアはアレンの方を向く。

「・・・ アレン・カグジェリカだ」

アレンは不機嫌そうな表情で名を名乗る。

「う・・・ やっぱり怒っているのかな・・・。 今後、あまり中途

半端な言い方は辞めるようにしなきゃ

ラスリアがその場で考え事をしていると、田の前には紫色の髪をし

た男 ミュルザだった。

「きやつ・・・」

その顔面がかなり近かつたので、ラスリアは思わず後ずさりをする。

「かわいい娘ちゃん。・・・俺の話聞いてた・・・？」

そう訊かれた時、彼がラスリア達に自己紹介をしてくれていたのを聞き逃していた事に気がつく。

「『』、ごめんなさい・・・」

「まあ、いいつて事よ！！」

明るそうな笑顔でそう言つてくれたミュルザを見て、ラスリアはホッとした。

「じゃあ、嬢ちゃんのためにもう一度！・・・俺の名前はミュルザ・プライドル。一応格闘家で、このイブール姐さんに雇われた傭兵つてかんじさーよろしく！」

「はあ・・・」

元気に自己紹介をしたミュルザは、ラスリアと握手したかと思つと、その腕をブンブンと振るつ。

「・・・気安く触るな」

「・・・ああ！？」

その直後、アレンがラスリアとミュルザの間に入り、彼の腕を掴み上げる。

アレン・・・？

その険しい表情を見たラスリアは不思議に感じた。

確かにアレン（彼）は普段から無愛想な態度を取つたりするけど、この何かを警戒しているようなかんじは一体

周囲が険悪なムードになりつつある。それを察したイブールが口を開く。

「こ・・・こで出会つたのも何かの縁だし・・・良かつたら、皆で一緒に遺跡探索しない？」

「そ・・・そうですね！そつしますか！」

その一言に助けられた感覚を覚えたラスリアは険悪なムードになつてゐるアレンとミュルザを宥めた。

「この風変わりな2人組と出会つたアレンとラスリアは、オーブル遺跡の中を進んで行く。

「それにしても、この辺り一面にある壁画……何を意味するのかねえ……」

上を見上げながらミュルザが呟く。

「はるか昔、いろんな星を旅していた一族……今まで言う古代種ね。彼らがこの地を見つけた時に建てた神殿の一つが、ここだと言われているわ……」

「……イブールさん。それは……？」

本を読みながら話す彼女に、ラスリアが横から話しかける。

「……ああ、これ？これは、遺跡とかいろんな事を事前に調べてまとめた、私のメモ帳。分厚い本を持つてくるわけにはいかないしね！」

「……かなり書き込んでいるようだな」

先ほどからずっと黙り込んでいたアレンが、珍しく口を開く。

「まー、それはどうも」

アレンが会話に入ってきて驚いていたイブールだが、すぐに笑顔で返す。

イブールさん……こつやつて会話していると普通の人見えるけど、何か不思議な感覚がするのは……なんでだろう？

「どうした？」

「わっ……！」

ラスリアの耳元で、ミュルザが囁く。

「いえ……別に……」

いきなり囁かれて驚いたラスリアの心臓はドキドキと鳴っていた。

「・・・おい」

アレンの囁太い声が聞こえた直後、辺りを見回すとそこにはいたのは

「あれが、<sup>アンデッド</sup>不死者・・・」

皮膚が焼けただれ、白目を向いているバケモノが彼らの周囲を囮んでいた。

「ラスリア・・・お前は下がつていろ」

「う・・・うん・・・」

ラスリアが頷いた直後、アレンは剣を構えて不死者に立ち向かっていく。

「・・・サポートするわ・・・ミュルザ！！」

そう叫んだイブールはラスリアの側にいたミュルザに合図する。

「・・・了解」

ワインクしてから走り出したミュルザは敵の骨が砕けるくらいの勢いで蹴り飛ばし、イブールは呪文の詠唱を始めた。そしてその詠唱しているイブールをサポートするように、アレンが剣で敵を斬る。ラスリアは剣士も魔術師も格闘家も、戦っている姿を見た事がなかつたがため、戦闘中にも関わらず少し嬉しそうにしていた。

「きやあっ！－！」

「ラスリアちゃん！－？」

敵をほとんど片付けたと全員が思い込んでいたため、ラスリアの背後に近寄っていた不死者<sup>アンデッド</sup>の存在に気がついていなかつたようだ。敵は背後からラスリアにしがみついていた。

「いや・・・放して・・・！」

振り払おうにも、しがみついてきた不死者は成人男性くらいの大きさはあつたため、簡単には振り払えなかつた。

「！－！－！」

ラスリアから少し離れた場所にいたアレンはすぐさま走り出す。

「あー・・・・・・・」

理性を失い、うなだれたような声を出す敵はラスリアの首筋に今にも噛みつきそうな目つきだ。

嫌・・・怖い

!!!

ガブッ

鈍い音が聞こえる。恐怖の余り瞳を閉じていたラスリアだったが・・・  
・その首筋には噛み疲れていた痕はなかつた。

「ミユルザ・・・さん・・・？」

後ろを振り向くと、そこには不死者の顔面を右手でわしづかみをして、  
持ち上げていてるミユルザの姿があつた。

「・・・ったく、いくら美味そつな人間だからって、がつつく事はないだろうに・・・」  
「え・・・・！」

その台詞を聞いたラスリアはギョッとした。

“美味そうな人間”・・・・！？

不可思議な台詞に、ラスリアは身体を硬直させる。すると、彼女の  
考え方を読んだように

「安心しな。捕つて喰つたりはしねえよ。・・・今の俺は“首輪付

き”だからな・・・」

そう呟いたミユルザから、黒い光が現れる

## 第8話 一風変わった2人組＜前編＞（後書き）

いかがでしたか。

意味深な台詞を述べたミコルザですが、彼は一体何者なのか？  
また、イブールに不思議な感覚を覚えたラスリア。

その真意はいかに・・・！？

メインキャラが一気に2人登場しましたが、これにはちゃんと理由  
があります。

その辺は次回以降で書いていきますので、お楽しみに

ご意見・ご感想をお待ちしております（^ ^

## 第9話 一風変わった2人組く後編く（前書き）

アレン編では、アレン ラスリアの順で視点が変わっていましたが、今回のように1話丸まる一人の視点で物語が進む場合もあります。

## 第9話 一風変わった2人組く後編く

「そいつを倒しなさい！！！」

不死者に襲われているラスリアを助けようと走りだそうとしたアレンの背後で、その叫び声は聴こえた。

その後は本当に一瞬の出来事だった。瞬きをした頃にはラスリアの目の前にミュルザが立ち塞がり…黒い光を発したかと思うと、掴みあげた不死者を粉々に砕いてしまったのだ。

「・・・大丈夫？」

突然の出来事で身体が硬直しているラスリアに、イブールが手を差し延べる。

「ありがとう…」

その手を取つてラスリアは立ち上がるが、その表情かおは驚きと戸惑いで溢れていた。

なんなんだ、こいつらは

アレンも、何がなんなのかわからずに入った。

「さて…」

ミュルザがボソッと呟いたかと思つと、ラスリアの腕を掴みあげる。

「痛つ…」

「貴様…！」

アレンはすぐに身構えたが、ミュルザはそんな彼を睨みつける。

「！…！」

最初は黒かつたミュルザの瞳が、血のように真つ赤だつた。身体が…石のように重い…！

「ミュルザ！」

「仕方ないだろ？、イブール。見られちまつたものは…」

ミュルザの横で、イブールが険しい表情をしている。

「貴様…やはり…！」

アレンが動けない身体を動かそつと足掻きながら、ミュルザ達を睨みつける。

当のミュルザは、怯えるラスリアと、立ちすくむアレンを見て口を開く。

「…察しの通り、俺はイブール（この女）に付き従つ悪魔だ」

「悪…魔…？」

彼の側で、驚きの余り声を失うラスリア。

すると、ミュルザの大きな手が彼女の頬に触れる。

「何…ちょっと頭の中をいじるだけさ。すぐに終わるぜ…」

「…止めなさい…ミュルザ…！！！」

ラスリアの記憶を消そうとしたミュルザを、イブールが止める。

「わざわざ記憶を消さなくていいわ

「…じゃあ、どうするんだ？」

「そうね…」

イブールは考えながら、アレンの方をちらりと見る。

彼らの間で沈黙が続く。

「…じゃあ、私達の旅に同行してもらおうかしり…」

「なつ…！…？」

「…・・・私ね、旅をしながら、ある人物を探しているの

「…・・・！？」

イブールが低い声で呟いた直後、アレンは殺氣を感じ取る。人とは思えない殺氣・・・。だが、この女は普通の人間…。一体

?

アレンが考え事をしていると、フワツと身体が急に軽くなる。

「まあ・・・てめえやこのお嬢ちゃんの“探しているモノ”も、ついでに探す手伝いをしてくみたいだぜ？」

ラスリアの腕を放して、ミュルザは話す。

「もしかして・・・あなたは、人間の心が読めるの・・・？」

「・・・まあな」

「・・・・ちょっと！－！」

ミュルザとラスリアの会話に、イブールが割り込んでくる。

イブールは彼の耳元でコソコソと話し出す。

「ちょっと！－！” 探す手伝い”だなんて、私は考えていないわよ！－！」

「まあまあ・・・。それより、あの銀髪野郎と黒髪の嬢ちゃん。どちらにせよ、この2人の記憶は消せなそうだ・・・」

「・・・どうして？」

「それは・・・」

・・・何を話しているのだろうか？

2人でコソコソしているのを見て、アレンやラスリアは不思議そうな表情で首をかしげていた。

「でも、“悪魔”だなんて聞いて、ビックリ！－・・・という事は、人間が持ち得ないような特殊能力を持っているというところかしら？」

魔物との戦いから数時間が経過し、すっかりいつもの調子に戻ったラスリア。

記憶を消されそうになつた事なんて、當に忘れていたというような雰囲気だった。

悪魔・・・か。人に化ける奴は、相当魔力の高い連中だと聞いた事があるが・・・

アレンは悪魔について考える。

それは闇に生き、人間の恐怖・絶望・狂氣・欲望など、あらゆる負の想念を好む。そして、狙いを定めた獲物は肉体から魂まで、全てを糧にしてしまう生物。

そう考へると同時に、ミュルザ（この悪魔）を従えているイブールは、相當な暗い過去があるのでと考へていた。

「ラスリア・・・だけ。あんた、見た目と違つて凶太い神経しているなあ・・・」

平常心に返つてゐるラスリアを見て、ミユルザはため息をつく。

「……とりあえず、本来の目的を達成しましょう。おそれく、もう少しで遺跡の中心部に到着するはずだから……」

「……“遺跡発掘”という目的は、どうやら本当のようだな」

「……ええ」

アレンの咳きに、静かに応えるイブール。

「考古学にもいろいろな種類があるけど……私が一番興味あるのは古代種“キロ”と、彼らが作り上げた文化……星と対話する能力を持つ彼らは、いくら調べても尽きないくらい、奥が深いのよ……」

「……」

「“古代種”ねえ……」

「“星と対話する能力”……」

イブールの話に、ミユルザとラスリアはポツンと咳く。

「……どうやら、ここがこの遺跡の中心地みたいだな……」  
そう呟きながら、アレンは辺りを見回す。

彼らが通ってきた通路に描かれていた壁画は、どうやらこの場所の壁画への伏線だったと思われる。

「廊下に描かれていた壁画は、星を旅するキロ達の道のり……。そして、遺跡の中心地であるここに描かれている壁画は……レジエンティラス（この世界）を見つけ、星と語りながらその地に住む生き物を探し出す……。それを意味しているのかしら……？」  
この空間に描かれている巨大な壁画にソッと触れながら、感激するイブール。

ミユルザはその隣でやる氣なさそうな表情かおをしている一方……

「……どうした……？」

アレンは壁画を触り、瞳を閉じて黙り込んでいたラスリアを叩撃する。

「……・・・・・」

彼の呼びかけに対し、ラスリアは何も答えなかつた。

何をしているのかと気になりながらも、とりあえずは黙つて見守るアレン。1分程経過したくらいた、ラスリアの瞳が開く。

「古代種・・・彼らは、永い旅路を経てこのレジエンティラスにたどりついたんだな・・・って考えていたの」「・・・そう考えさせるモノが、壁画にあつたのか・・・?」

アレンがラスリアに問いかけると、せつなそうな表情かおをしていた彼女が、ハツと我に返る。

「なんとなく・・・かな?それより、イブール! !」

「何?ラスリア?」

首をかしげるアレンに対し、あたふたし始めたラスリアは、少し離れた位置にいたイブールを呼ぶ。彼女に呼ばれたイブールは、両手に何かを握り締めていた。

「何か、収穫になる物とかあつた?」

「ええ!・・・まあ、大した物ではないけど・・・」

そう呟いたイブールは、握り締めていた物をアレン達に見せる。「石の・・・かけら?」

イブールの掌にあつた物は、淡い水色をした石のかけらだった。

「これが“収穫”になるのか・・・?」

「絶対とは言えないけど・・・。でもね、今さつき調べたら、この石は遺跡を形作る物質とは全く異なるみたいなの。・・・“未知の物質”といった所かしら?」

“遺跡発掘”とは、ここまで調べ上げるモノなのか?

?

考古学に対して知識も興味もないアレンにとつて、熱心に遺跡を調べるイブールが不思議であり、逆に新鮮な感覚を持つていた。

「とりあえず、今回の調査はここまでね!」

「・・・もういいのか・・・?」

「だって、この遺跡を隅から隅まで調べていたら、一生を終えちゃいそなくらい時間がかかりそうですもの・・・」

そう語りながら、イブールはフツと嗤つ。

「イブール姐さん！学術都市アテレステンに・・・一旦戻るのか？」

ミユルザはそう問い合わせながら、チラツとラスリアの方を向く。

どうやら、ミユルザ（この男）は相手の心を読めるのだろうな・・・。だが、なぜラスリアの方を向く？

「まあ、結構動いた事だし・・・アテレステンでメシでも食べるか

ね！アレン君」

大きな声で話しながら、ミユルザがアレンの肩に腕を置く。

「・・・おい・・・！」

アレンはその腕を振り払おうとすると

「あの嬢ちゃんは、他人に知られたくない事があるらしい・・・。

今は詮索しない事をお勧めするぜ・・・」

耳元でそう囁いたミユルザは、その後にアレンの肩から腕をどかす。

その後、彼ら4人はオーブル遺跡を出て、ラブンツェル山脈を下山していく。次の目的地は学術都市アテレステン　　一風変わった2人組であるイブールとミユルザと共に旅をする事になったアレン達。彼はオーブル遺跡で“イル”の手がかりがあまりなかつたのに対して残念な気持ちはあつたが・・・それよりも、ミユルザが言つていた“他人に知られたくない事”の方が気になつて仕方ない状態になつていた

## 第9話 一風変わった2人組＜後編＞（後書き）

いかがでしたか。

今回出てきたイブールとミュルザのキャラ設定は漫画『黒執事』の影響を強く受けています。しかし、この設定のおかげで、いくつか構想が浮かんできていますので、『黒執事』万々歳ですね  
ちなみに、主人公のアレンのモデルは『FFVII』のクラウドや、『テイルズオブリバース』のヴェイグみたいな寡黙キャラです！

ちなみに、次回はセリエル編によるスタートです。

今回の前編・後編を見ていると、よくわかるかもしれない内容となつてゐる・・・かな？

ご意見・ご感想のほかに、細かい評価もお待ちしてます

## 第10話 獣奇殺人（前書き）

今回、1文だけ少し残酷な表現が入り混じっているので、苦手な人は読まない事をオススメします。

## 第10話 獣奇殺人

「悪魔」

人間を含む、全ての生物が持つ負の想念から生まれた生物。「天使」と敵対関係にあり、一説では“神が堕落した存在”という話もある。皆が一様に黒い翼を持ち、鋭い牙を持つ。能力の強い悪魔は人間の姿をとつて、時折、人の手によつて“召喚”される事で世界に現れる事も少なくない。恨み・絶望・恐怖といったあらゆる負の想念を好む。そして、元は「神」だったとされる事から、彼らを崇拜する「悪魔信仰」なるモノも、人々の知らぬ所でひつそりと動いていたのだつた。

「……ちょっと、セリエル！ あたしの話、聞いてるの！？」

「え・・・？」

軍が運営する寮で暮らしていたセリエルはこの日、同室のルミナと朝食を摂りながら会話をしていた。

彼女の話をあまり聞いていなかつたセリエルは、きょとんとした表情でルミナを見る。

「あ・・・『ごめんなさい』。あまり、ちゃんと聞いていなかつたわ・・・」

セリエルの台詞の後、ルミナはため息をつきながら口を開く。  
「全くもう・・・。だからね、もう4人目なのよ・・・！」

「“4人目”？」

「・・・私達のいるこの街で起きた連續獣奇事件・・・。しかも、殺されたのは皆女性で、身体をめつた刺しになつていたのよ・・・！」

最初は低い声を出していたが、次第に怯えた表情になりながら話すルミナ。

「獣奇殺人ねえ・・・」

「あーもーーー！ なんで、そうセリエルは落ち着いてられるのかな

あ！？

「・・・もつと恐ろしい事を知っているからかしら・・・」

周囲で殺人事件が起きているにも関わらず、落ち着いてどこか他人事のような表情をするセリエル。しかし、彼女の咳きだけはルミナには聞こえなかつた。

自分が“世界を滅ぼしてしまった存在”なんだし、そんな殺人事件ごときで「怖い」と感じる事はないでしょうね・・・

コーヒーを飲みながら、セリエルはふと窓の方に視線を移す。

軍司令部に近い場所にあるとはいっても、この寮の場所自体は住宅街のど真ん中。朝は犬の散歩をする人や、軍事学校に通う学生の姿が寮の窓からよく見える。

「・・・あら？」

「・・・ルミナ？？」

セリエルのが振り向くと、ルミナが何かを見つけたような表情をしていた。

「・・・どうしたの？」

「・・・何か今、誰かに見られていたような・・・

「え・・・！」

その言葉を聞いた瞬間、セリエルはバッと身構える。

「あ・・・ごめん、セリエル！やつぱり、気のせいかも！？」

何かを感じ取つたのかと思いきや、すぐに普段の表情に戻るルミナ。「・・・行きましょ、セリエル！始業時間には遅れないようにしなないと・・・」

ルミナは口を動かしながら、朝食の食器を片付けるために席を立つ。その時の表情に戸惑いと不安が入り混じつているのを、セリエルは気がついていなかつた。

「・・・女性の連續猟奇殺人・・・？」

お昼の時間帯となり、セリエルは軍の食堂でナチと今朝していた事件についての話を持ち出した。

「ああー・・・。そういうえば、憲兵司令部に勤めている同期が、そんな事件の話をしていましたね・・・」

「具体的に言うと、どんな事件だったの・・・？」

セリエルがナチを見つめる。

少しどキッとしたナチだが、すぐに声を小さくして話し出す。

「・・・新聞とかでは“刃物で切り裂かれた”とされていますが、本当はそれだけじゃないんです」

「どういう事？」

「凶器は鋭利な刃物ですが、被害者は皆、未婚の女性で、全身の血が抜かれた状態で殺されていたらしくて・・・」

「血が抜かれた・・・？」

深刻な表情になるセリエル。

事件の内容が残酷なのに、怖がるスキもないセリエルに、ナチは首をかしげながら見つめていた。

「こんな事件が続くのは、治安の悪い証拠です。・・・セリエルさんだって、同じ女性として無関係ではないですから、気をつけてくださいね？」

「・・・そうね、気をつけておくわ・・・」

そう呟いたセリエルの瞳には、友人であるルミナの姿が映っていた。ルミナ・・・・?

彼女の視線の先にいたルミナは虚ろで、何も見えていない表情のよう見られた。

普段は元気で世話好きなルミナの変わった表情に、セリエルは違和感を感じていた。

それから、数日後・・・・。

「それでは・・・失礼します、セリエルさん・」

「ええ、お疲れ様」

1日の業務が終わり、セリエルはナチと別れて寮へ向かおうとしていた。

そういえば、ルミナ。司令部には来ているのに、寮には帰つてきていはないな・・・

ここ2日間ほど、仕事はしているが、寮には帰つてこないルミナの事をセリエルは気にしていた。

買いたい物があるのを思い出した彼女は、来た道を引き返し、お店が立ち並ぶ通りへ向かう。

「あら、軍人さんじゃない！いつも、お勧めご苦労様です」

「はあ・・・・」

必需品の買出しに来て、セリエルは軍服のまま来た事を少し後悔していた。

今会話していたお店の人はああ言つてくれるが、一般人でも軍人を嫌っている人は少なからずいる。だから、他の軍人もプライベートの際は私服に着替えて街をうろつく事の方が多いと言われている。一通り買い物を終わり、今度こそ寮に帰るうと思つた瞬間・・・

「つ・・・・・・！」

何かを感じ取つたのか、セリエルの全身に鳥肌が立つ。

この悪寒は・・・凍りつきそうな感覺は・・・何・・・・・！？

これを「第六感」シックスセンスとも呼ぶべきなのか。この時、セリエルは今まで感じ取つたことのない“何か”を感じ取つていた。

「きやあああああああああつ！――！」

「――！？」

割と近い場所から、女性の悲鳴が聞こえてくる。

何があつたのかとその場へ駆けつけてみると、そこには床に座り込んだ女性の姿が・・・

「どうかしましたか・・・！？」

座り込んでいる女性の目線に合わせて、セリエルは横から声をかける。

顔が真っ青になつてゐる女性は、全身を震わせながら、前方を指差す。

す。

「あれ・・・・・」

“あれ”つて、一体何が・・・?「

その後、女性が指差している方向をセリエルは見る。

「・・・・・! ! ! ! !」

自分の視線の先にあるモノを確認した時、セリエルの表情は激変する。

そして、驚きの余り声を失う。

どうして・・・こんな事に・・・・・! ! ?

普段、余り驚いた表情を見せないセリエルの表情を固まらせたのは・

・・四肢をめつた刺しにされ、全身の血を抜かれたルミナの変わり果てた姿であった

## 第10話 獣奇殺人（後書き）

いかがでしたか。

今回は、これまでのと比べると、1話分が短く感じられたかもしれません。

これは、話の展開的に”1ページで区切つておいつ”と考えた末の量となっています。

話についてですが、セリエルは寮暮らしとなつてますが、ちなみにナチは実家暮らししなので、彼女とは少し離れた場所に住んでいると  
いう設定です。

ちなみに、”憲兵隊”は今で言つ警察官みたいな役目をする軍人さん達ですね

なぜ、ルミナは殺されてしまったのか！？

セリエルが感じた悪寒は何を意味しているのか？

次回以降をお楽しみに

引き続き、”意見・感想・評価をお願いいたします。

## 第1-1話 友の死を題の当たりにして（前書き）

物語中、”一週間後”などの時系列を表す単語が出でてきます。  
ごつちやにならないために書いておきますが、このセリエル編とアレン編は、前者の方が後者よりも時間の流れが早いという設定になっています。

## 第1-1話 友の死を目の当たりにして

ギルガメシュ連邦の軍司令部付近に隣接する憲兵司令部。街中で友人の変わり果てた姿を見たセリエルは、第一発見者の女性と共に憲兵司令部を訪れていた。

「……で、あの女性の悲鳴を聞いて、貴女が駆けつけた……と  
いう事か？」

「はい・・・」

第一発見者だった女性は、精神的に参つていて事情聴取を受ける状態ではなかつた。

そのため、セリエルが彼女の代わりに発見当時の話を憲兵にしていたのであつた。無論、現段階は被害者と近しい関係であつた事も関係している。

「被害者の女性が亡くなる前、何かおかしな事はありましたか？」

「おかしな事・・・」

この時、セリエルの頭の中には軍の食堂での出来事が浮かんでいた。でも、あの虚ろな表情と事件については、特に関連性もないだろうし・・・

そう考へると、特に話す程の事でもなかつた。

事情聴取が終了後、セリエルは寮に帰つた。2人部屋である彼女の部屋は、妙に広く見えた。いつもは「少しうるさい」と思つていたルミナの存在もない・・・。軍人用の寮のため、新しい人は早い内に入寮するだろうが、セリエルの心中は何かポツカリと穴が空いた間に陥つていた。

私に“心”なんてないはずなのに・・・この胸の苦しさは一体・・・

セリエルは自分の胸に右手を当てながら、その場に立ち尽くしていた

た

事件から1週間ほど過ぎ、一連の連續猟奇殺人事件の記事が新聞に飾られることはなくなった。犯人は捕まつていないが、恐怖に怯えている人々の心は、少しは和らいできたのかもしれない。しかし、まだ終わりではなかつた……。

「セリエルさん。あれから……新しい同室の方、入りましたか?」「いえ……流石にまだ一週間しか経っていないし、すぐには入つてこないみたいね」

お昼休憩中、セリエルとナチはいつものように軍の食堂で昼食を食べながら会話をする。

「それより……事件の方は、どう? 進展はあつたの……?」「いえ……友人曰く、犯人が全然特定できなくて、参つているらしいです」

「……そう……」

「すみません……」

「いや、貴方が謝る事でもないわ……!」

ナチが申し訳なさそうな表情をしていたので、セリエルは少し焦つた。

2人の間に沈黙が走り、少し気まずい空気が流れる。  
「近いうちに……」

「え……?」

「近い内に、例の憲兵司令部にいる友人に会いに行く予定があつたんですよ。……せつかくなので、今日あたり行つてみますか?」

「ナチ……あなた……」

少し嬉しそうな表情でセリエルは咳き、それを見たナチは顔を少し赤らめながら口を開く。

「……普段、他人に興味を持たない貴女が、めずらしく凹んでいるようにも見えたんで……俺で良ければ、力になりたいな……と……」

ナチの顔を見た時に、少し緊張しているのをセリエルは気がついていた。

「ふふ・・・じゃあ、お言葉に甘えよつかしら？」  
セリエルはにんまりとした表情かおでナチを見上げた。

「おー、ナチ君ですか！久しぶり・・・！」

「よっ！」

ナチと一緒に憲兵司令部を訪れたセリエル。

彼は、自分の同期であるクウラと会話をしていた。このメガネをかけ、紺色の髪色をした男から、何か不思議な香りが漂っているのに、セリエルは気がつく。

「はじめまして。彼の同僚である、セリエル・ヒエログリフ少尉です。・・・失礼ですが、もしかして香水とかお好きですか・・・？」  
“男性が香水をつける”というのが珍しく感じたのか、セリエルは自己紹介の後に尋ねる。

「ええ・・・まあ・・・」

「・・・でも、以前は香水なんてつけていなかつたよな？」

同期の意外な趣味に、ナチは首をかしげながら尋ねる。

「まあ、最近できた趣味といった所ですかね・・・。まあ、それはさておき・・・」

眼鏡のレンズ越しに見えるクウラの瞳が、真剣そうな雰囲気を出し始めた。

「・・・僕もまだ下つ端なので、あまり具体的な事は知りませんが・・・」

クウラは周囲には聞こえないくらいの声で、事件の事について話しだす。

「上司が仕事中に喰いてたのをたまたま聞いたのですが・・・どうやら今回の猟奇殺人事件、“悪魔信仰”が関わっているんじゃないか・・・って」

「“悪魔信仰”・・・？」

「人間が持つ負の想念から生まれた生物・・・。天使と敵対する存在であり、強い魔力を持つ・・・」

悪魔信仰について語るセリエルの表情は、いつの日かのように虚ろになっていた。

ナチとクウラの視線がセリエルに集中する中、彼女は我に返る。

・・・今、なんで私はこんな事を言ったの・・・!?

今までと異なるのは、セリエルの意思と異なる意思が働いていた事に、彼女自身が気がついていた点だった。

その後、憲兵司令部を後にしたセリエルとナチは帰宅の炉についていた。

「犯人・・・捕まるといいですね・・・」

「・・・ええ・・・」

2人は、クウラが話していた“悪魔信仰”の事を考えていた。

「悪魔・・・か。本当に、そんなのがいるんですかね・・・?」

「・・・普通だつたら、ありえない話よね・・・でも、私みたい  
な存在が実在するんだし、本当にいるのかもしないわ・・・」

「・・・殺された女性達は、相当無念だつたんでしょうね・・・」

「ナチ・・・?」

しほんでいるような声が聞こえた直後、セリエルはナチの方を見る。  
「被害者の女性のほとんどは、20代の人で・・・人生これからつ  
て時に死んでしまったのですから・・・。捕まえられるなら、自分  
の手で犯人を捕まえたいけど・・・“管轄外”だから、許可は下り  
ないんだろうなあ・・・」

そう呟くナチの瞳は少しだけ潤んでいた。

「そうね・・・」

セリエルがポツンと呟いた後、2人は黙つたまま歩き続ける。

彼らの目の前には、血のよう赤い夕日に染まつた街並みが広がつ  
ていた・・・。

「それじゃあ、ナチ。また明日……司令部でね」「はい」

別れ道までたどり着いたセリエルとナチは、双方が帰るべき道を歩き出そうとしたその時だった。

「え・・・・・！？」

セリエルの全身に、鳥肌が立つ。

これは・・・この感覚は・・・・・！

この時、セリエルが感じていた悪寒は、殺されたルミナを発見する直前に感じたものとほぼ同じものだった。

「セリエルさん・・・どうかしましたか？」

不安そうな表情かおで彼女を見つめるナチ。

その直後、セリエルはもと来た道の方へと走り出す。

「セリエルさん！？！」

「ナチ・・・ちょっと、司令部に忘れ物をしたので取りに行つくるわ！？だから、先に帰つてて・・・・！」

ナチに向かつてそう叫んだセリエルは、悪寒を感じられる方角へと走っていく。

ゼーゼーと息切れをしながら、辺りを見回すセリエル。日が沈みかけていた街中はとても静かであった。そして、彼女がいる場所は普段、この時間帯になると人があまり見られないはずであったが・・・

「あれは・・・」

小さな声でポツンと呟くセリエル。

その視線の先には、憲兵の黒い制服を身にまとつた青年

クウラの姿があつた。

なぜ、クウラ（彼）がこんな場所に・・・？

不審に思つたセリエルは、彼の後を尾行てみる事にする。その後、クウラを尾行していく内に、どんどん人気のなさそつな細道へと入り込んでいく。

そして、目的の場所に到着したのが、クウラはある建物の中へと

入つていぐ。

・・・どうして、空き家の中に入ったのかしり・・・？でも、もしかしたら・・・

ここで引き返すべきか迷ったセリエルだが、この機会はもう一度と訪れないかもしない・・・そう考えた彼女は、クウラの後を続くようにして中へ入つていぐ。

カツカツカツ・・・

クウラは革靴による足音をたてる一方、セリエルは足音をたてないよう慎重に進んでいた。

そうして、空き家にあつた地下への階段を降りると、廊下のような場所に出る。

地下室・・・にしては、大きな造りのような・・・？

セリエルが辺りを見回しながら考え方をしていると、クウラは大きな鉄の扉に立ち、何かのボタンを押し始めた。その数秒後、鉄の扉はが少しだけ開き、彼は中へと入つていぐ。

クウラが扉の中に消えてから1・2分ほど経過した後、周りに誰かいないか警戒しながら、扉の前まで進むセリエル。

数字を入力する機械・・・。そういえば、軍でも機密文書を入れる金庫とかは、こういう機械が設置されていたわね

視力の良いセリエルは、クウラがどの番号のボタンを押していくかしっかり見ていたため、わずか数秒で扉の開閉に成功する。中に入ると、周囲には、物を置くような棚がいくつあるだけだった。

あら・・・？

部屋の奥の方に、黒いカーテンが見える。

この場所は当然地下なので、太陽の光を遮るカーテンは必要ないはず・・・

不思議に思ったセリエルは、そのカーテンにそつと手を触れる。そして、中に何があるかと顔を覗かせると・・・

「・・・・・！」

その瞬間、あまりに異様な光景に、セリエルの表情が固まる。

黒いカーテンの奥に見えたモノは・・・黒装束を身にまとい、顔面を仮面で覆つた人々が、何かに祈りを捧げるような体勢で座り込んでいた。その数は、数人とかではなく、20人近くはいるような状態だった。

まさか、この場所・・・。

何とか我に返つたセリエルは、彼らが何に祈りを捧げているのかを見極めようと、周囲を見渡す。すると、彼らの向く方向にいたのは・・・背中に漆黒の翼を生やし、黒髪・銀色の瞳を持つ男だった。その男は、玉座のように立派な椅子に座つて信者達を見下ろしている。あれが、「悪魔」・・・。私が感じた悪寒の正体は、あれだつたという事ね・・・

黒いカーテンから一歩引いたセリエルは、鳥肌が立つていて自分の右腕を見つめていた。

ガツ・・・・！

その直後、セリエルは背後から何者かによつて頭を殴られる。

「うつ・・・・！」

急に痛みを感じたセリエルは、そのまま地面に倒れる。

「軍人・・・しかも、女に尾行られていたとはな・・・」「おそらく、クウラのせいですね。・・・しかし、どうするんですか？この女・・・」

「そうだなあ・・・。どうせ、処分する訳だし・・・」

セリエルの頭上では、見知らぬ男たちの声が聞こえてきていた。  
そして、少しづつ意識が遠のいていくのであった

## 第1-1話 友の死を目の当たりにして（後書き）

いかがでしたか？

悪魔について考えていたため、背後に誰かいる事に気がつかなかつたセリエル。

信者の手によつて氣絶させられた彼女は、今後どうなつてしまつのか！？

次回をお楽しみに

「」意見・「」感想をお待ちしております（^ ^）

## 第12話　”人ならざる者” 同士が交わす言葉（前書き）

今回もナチ視点でのスタートです。

## 第12話 “人ならざる者” 同士が交わす言葉

セリエルさん・・・凄い表情をしていたけど、大丈夫かな・・・？  
帰宅したナチは、軍服から部屋着に着替えながら考える。その後、カバンの中に入れていた厚みのある袋を取り出す。

「やつと、この本が読めるぜ」

この日、ナチがクウラの元を訪れたのは、彼に頼んでいた本を受け取るためだつたのである。父親の影響で書物をたくさん読む事が好きなナチは、早速読もうと本の表紙をめくる。

「ん・・・？」

本を開いた瞬間、何か紙キレのようなモノが床に落ちる。部屋の床が絨毯だつたため、表紙をめくらなければ、一生気がつかなかつたのかもしれない。

「・・・手紙？」

本の中から出てきた紙は、手紙の入つた封筒だという事に気がつく。「今時、なぜ手紙が入つているのか」と疑問に感じたナチであつたが、とりあえずはその内容を読んでみる事にした。しかし、文面を読み始めて数秒後、彼の表情が一変する。

「・・・これは・・・！」

一方・・・セリエルは誰かに殴られた衝撃で、意識を失っていた。

「う・・・」

意識がはつきりしてきたセリエルは、ゆっくりと瞼を開く。  
気がつくと、両腕を縛られたまま、何かの上に横たわつていた。頭は殴られた事もあり、まだ痛みを感じる。それがより一層、セリエルの意識をはつきりさせたようだ。

「気がついたようだな・・・」

頭上を見上げると、そこには黒髪・銀の瞳を持ち、背中に漆黒の翼を生やした男が立っていた。

「あんたが・・・“悪魔”・・・？」

「ほお・・・悪魔を見て、怖くはないのか・・・？」

悪魔の台詞を聴いた直後、セリエルは一瞬黙る。

「・・・何なら、本当の姿を見せてくれてもいいわよ。」「

逆に相手を搔さぶるような表情で、セリエルは悪魔を見る。しかし普通の女性だつたら、悪魔を目の前にして堂々としている事は無理に等しい。おそらく、セリエルだからこそできる事なのかもしない。

「例の獵奇殺人事件・・・あんたの仕業なの？」

とりあえず、身動きの取れないセリエルは事件の事を訊ねようと話しかける。

その切り替えの早さに、最初は悪魔もきょとんとしていたが、すぐに口を開いて話し始める。

「悪魔とは、異性の魂を好む生物・・・。信者達が連れてきた人間共の魂を戴いていただけだ・・・」

「・・・行儀の悪い悪魔だこと・・・！」

犯行を認めるような言動を聞いたセリエルは、拳を強く握り締めながら必死で怒りを抑えていた。そして、静かに悪魔を睨みつける。しかし、その表情を見た悪魔は、逆に機嫌の良さそうな表情になつてこう告げた。

「・・・戸惑いのない、純粋な怒りの心・・・お前、なかなかいい表情をするではないか・・・！」

そう言った直後、悪魔の色白い手がセリエルの頬に触れる。「顔もそこそこ美人だし、何より意志が強い・・・。人間の女とは、美しい者ほどその魂も美味しいというものだ・・・！」

そう呟きながら、色白な指は頬から首筋に、首筋から胸の方へスルとなぞるように移動していく。

「・・・・・！」

セリエルは顔を少し赤らめながらも、そっぽを向いて何とか動じてい  
ない雰囲気を出そうとしていた。

「・・・・・言つておくけど、あんた達悪魔が私を“食べる”のは不可  
能なの。なぜだか、わかる・・・？」

「・・・・・なぜそう言い切れる？」

“不可能”という言葉に反応する悪魔。

「さあ・・・・・なぜでしょうね？あんただつて悪魔なんだし、自分で  
確かめてみれば・・・？」

そう言つてセリエルは鼻で笑つた。

「・・・・・口数の減らない女だ・・・」

その一言が気に障つた悪魔は、右手でセリエルの胸をつかみ、握り  
つぶすよつに強く抑え始める。

「あつ・・・・・！」

押しつぶされそうな痛みに絶叫しそうなセリエルだったが、歯を食  
いしばつて悲鳴を上げないよつ無意識の内に努めていた。

ギリギリギリ・・・・・

どんなに胸を締め付けても、セリエルは一言として悲鳴を上げなか  
つた。苦痛を感じている時の表情かおと叫びは、悪魔にとつては快樂で  
あつた。しかし、セリエルが自分の思つよつにならず、悪魔のイラ  
つきは強まる。

「まあ、いい・・・・・人間とあまり戯れるつもりは、ないのだから・  
・・わっさと済ましてしまつか・・・」

そう呟いた悪魔は、先ほどとは比べ物にならないくらいの邪氣を発  
する。

・・・・・一層、死んでしまつた方が楽なのかもね・・・

セリエルは無駄な足掻きをせずここで殺されれば、自分が“世界  
を滅ぼす兵器の鍵”といつ宿命から逃れられるのではと考え始めた。  
そして、自分がいなくなる事で“星の意志”に逆らう事ができるの  
ではないかという考えを持った瞬間、殺される事に恐怖を感じなく

なっていた。否、恐怖はもとより彼女には失うモノなどない。「人間のように生きようとも、所詮は異質な生き物」 そう

考えて今まで生きてきたのだ。

悪魔の瞳が銀から真紅に染まり、振り上げた右手からは鋭い爪が見える。その右腕が、セリエルの華奢な肉体を引き裂こうとした瞬間・・・

バチバチバチッ！！！

悪魔の右手が彼女の胸のギリギリまで振り下ろされた時、何か電撃のようなモノに弾かれる。その光景を見た信者達は、何が起きたのかとぞわめき始める。

「なんだ、あの娘は・・・！？」

「なぜ、人間の身体から電撃が・・・？？」

周囲がざわつく中、悪魔は電撃で少し焦げた、自身の右手を見つめていた。

「・・・どうやら、私は“彼”と違つて、魔法が使えるみたいね・・・」

意味深な台詞を言いながら、複雑な表情で嗤つセリエル。

“星の意志”が、私に魔法の使い方を教えてくれた・・・。“そう簡単に死なれては困る”といつ警告のつもりかしら・・・？ 炎の術で自分を縛っていた縄をほどいたセリエルは、ゆっくりと起き上がりながらふとそう思つた。

自分が横たわっていた台座を降りると、視線の先には、先ほどの悪魔がいた。

「・・・アビスウォクテラ（この世界）の人間は、魔術を使えない」と聞いていたが・・・

悪魔は今起きている事が信じられないような表情をしていた。

「あんたたち、悪魔なら・・・この癌が何を意味しているのか理解できるのでは・・・？」

そう呟いたセリエルは、自分の右目下にある癌を指差す。

悪魔は目を細めるようにしてセリエルの痣を見つめる。数秒後、セリエルが何を言いたかったのか理解できたのか、その場でため息をつく。

「“世界の心”を意味する痣・・・そつか、お前がこの世界の・・・」

そう口に出した直後、うなだれるよ<sup>うに</sup>して玉座に腰掛ける。

「・・・「食<sup>か</sup>えない」と言つた意味・・・理解できたようね?」

「お前は、俺達悪魔が“星の意志”には関わりたがらないのを・・・知つていたんだな?」

「みたいね」

「“みたい”・・・?」

悪魔が不思議<sup>かお</sup>そうな表情<sup>かお</sup>をすると、セルエルは自身の腕をみつめる。

「・・・私が持つて<sup>ちから</sup>いる能力<sup>ちから</sup>は皆、『彼が持つてい<sup>て</sup>いないモノ』らし  
いから・・・」

だから私には魔術を・・・“彼”には剣を扱えるようにした・・・  
みたいね・・・

その場で考え事をしていると、悪魔は腕を組みながら考え事をして  
いた。そして、何かを思いついたのか、閉じていた瞳を開く。

「・・・そろそろ帰るか・・・」

「えつ・・・・!!?」

悪魔の台詞<sup>だし</sup>を聞いた信者達が驚く。

「プライドン様・・・このまま人間界で、お力を貸していただける  
のではないでしょ<sup>う</sup>うか!?!?」

信者の一人が、すがるようにしてプライドンの前に出でくる。  
ビチャッ

プライドンが腕を一振りしたかと思つと・・・その信者の首が飛び、  
地面が血だらけになる。

「家畜にも劣る下等生物が・・・きやすくわたしに触るな・・・!」

「やめる・・・！」

このままでは、この場にいる人間たちを皆殺しにしそうな勢いだつたため、セリエルはライドンの前に立ちはだかる。

「・・・“人ならざる者”のお前が、なぜ人間を庇う？」

「・・・！」

“人ならざる者”という言葉に、セリエルはドキッとした。

「・・・あんたに話す義理はない」

「ふん・・・どこまでも掴めない女だ・・・」

ライドンはそう呟くと、フツと後ろを向く。

「・・・この世界では、日々人間が殺しあっているのに、なかなかいないもんだな。・・・“契約”できる人間・・・」

「“契約”・・・ですって？」

セリエルですら知らない“契約”という言葉に、悪魔は不可思議な顔をする。

「・・・“契約”とは、悪魔が特定の人間と交わす約束。力を貸す代わりに、全てが終わればその肉体と魂を我々に捧げる儀式だ・・・」

「・・・一体、なんのために・・・」

「さあな。“なぜ”と言われても、悪魔（我々）の本能的な行為だから説明などできん・・・」

「じゃあ、あんたはなぜ、その“契約”とやらをしたいの？」

その後、ライドンは一瞬だけ黙る。

「さあな・・・。ただ、同族で今、“もう一つの世界”で1人の女と契約している。・・・そいつの様子を見てなんとなく・・・かもな・・・」

話を聴くのに夢中になっていたセリエルは、一瞬の内にこの悪魔が飛び去ったのに気がつく事ができなかつた。

「おい・・・あんたが撒いた種なんだから、きつちり片付けをしてから消えろ・・・！」

どこに消えたかわからないセリエルは、辺りを見回す。

崇拜する悪魔の姿が見えなくなつた事で、呆然とする信者達。

「つ・・・！？」

その直後、セリエルの頭に頭痛が起る。

『・・・一つ忠告しておいてやろつ・・・』

「えつ・・・！？」

頭の中に声が・・・。もしやこれ、精神感応能力・・・？  
テレパシー

頭の中に、姿を消した悪魔の声が聴こえる。

『・・・“8人の異端者”に用心することだな・・・』

「！・・・！？」

その台詞を聞いたセリエルは、驚きの余り言葉を失つてしまつた。  
こうして悪魔がその場から消え去り、彼女の足許には一枚の黒い羽  
が落ちていたのだった

その後、ナチが呼んだ軍人達が、悪魔崇拜を行つていた信者達を  
逮捕する。彼らは悪魔<sup>ブリイドン</sup>の手によつて記憶を書き換えられたのか、一  
連の事件は自分たちの犯行である事を認めた。

そしてナチの同期であるクウラは、“悪魔信仰”を行つ集団の存在  
を知り、軍の特命で潜入捜査を行つていた。しかし、バレたら自分  
も殺されかねない事を理解していた彼は、友人であるナチに手紙を  
託すことで、もしもの時に動いてもらう予定だつた

信者

達を連行し終わつた後、クウラはセリエルに事の真相を話した。  
そして全てが終わり、セリエルとナチは再び、帰り道を歩く。

「それにしても・・・えらい目に遭いましたね・・・」

「そうね・・・」

ボーッとしながら歩いている事に気がついたナチは、セリエルに声  
をかける。

「怪我・・・大丈夫ですか・・・？」

「え・・・？」

「・・・やはり、ボンヤリしていましたね。俺の話、聞いていまし

たか・・・？」

セリエルがナチの方を見ると、彼は少しムスッとした表情をしていた。

彼女自身、ナチの声は聽こえていたけれど、考え方をしていたので応えてあげる余裕がなかつただけの事であつた。

「怪我の方は、問題ないわ。・・・心配してくれて、ありがとう」

「あ・・・いえ・・・」

柔らかい表情で笑うセリエルを見たナチは、ドキッとして顔を赤らめる。

考え方・・・ナチ（彼）の前ですると心配しちゃうから、寮に帰つてからの方が良さそうね・・・

とりあえずは考え方をするのを辞めたセリエル。だが、その頭の片隅には、去り際に言つた悪魔の言葉が消える事なく残つていた

## 第1-2話 “人ならざる者” 同士が交わす言葉（後書き）

いかがでしたでしょうか。

セリエルが言う”彼”と、プライドンが語っていた同族の話は、アレン編を読まれた方は何を意味しているかおわかりだと思います。ちなみに、悪魔であるプライドンの由来は、7つの大罪「<sup>プライド</sup>傲慢」からつきました。

日常生活で出てくる言葉を1・2文字変化させてキャラクターの名前を決めるのって結構面白いですよね

さて、次回はアレン編でスタート。

新たな仲間を得た彼らの旅は、どんな展開を見せる・・・？

ご意見・ご感想・評価、また作品に関する質問とかもあれば、是非お願い致します！

## 第1-3話 アテレステンに到着して（前書き）

今回は、イブールの視点からスタートです

## 第13話 アテレステンに到着して

古代種族「キロ」

彼らは星と対話する能力と、高い知識を持つ一族。星から星へ旅を続け、生活を続ける。その能力から多くの星を切り開き、生き物が住める世界へと変化させる事を可能にした。しかし、今でいう“人間”が増え始めた時期からその数が減り始め、“8人の異端者”なる者が現れて起こった世界大戦によつて、絶滅寸前に追い込まれる。レジエンディラスでの歴史において、彼らは絶滅したと思われていたが

「“星の意思”と関係があるからだ」

自分の連れであるミユルザが言つていた言葉の意味を、イブールは考えていた。

彼女と共に旅をするミユルザは、一見は口数の多い軽薄な雰囲気の男だが、その正体は強大な力を持つ悪魔。オーブル遺跡で銀髪の青年アレンと、黒髪の少女ラスリアに出会つた2人。しかし、不死者との戦いで、イブールが「命令」してしまつたため、彼らにミユルザの悪魔としての力を見せてしまつた。

その後、ミユルザ（悪魔）は2人の記憶を消そうと試みたが、消せなかつた。イブールが思い出しているのは、その直後の台詞だつた。  
悪魔の力で記憶の消せない人間がいるなんて、思いもしなかつた  
な・・・。でも、あのアレンって子はともかく、ラスリアは普通の  
女の子に見えるんだけど・・・。何者なのかしら・・・・?  
不思議そうな表情でイブールは考え方をする。

「俺様だつて完璧ではないんだぜ？ご主人様よ・・・！」

ミユルザが彼女の耳元で囁いた。

人間の心を読めるミユルザ（こいつ）の前では、あまり考え方できないな・・・。

イブールはフーッとため息をつく。

ラブンツェル山脈を降りたアレン・ラスリア・イブール・ミュルザの4人は、定期的に出ている馬車に乗つて学術都市アテレステンを目指していた。“学術都市”と言われる事もあり、馬車の乗客には学者や宗教家の風貌をした者達が多い。

「ねえ、イブール・・・」

ふと顔を上げると、ラスリアがイブールに声をかけてきた。

「なあに？ラスリア・・・」

彼女はラスリアの顔を真正面から見る。

黒髪と黒い瞳 東方にあるシモク二人に似た顔立ちだけ

れど、言葉のなまりからして、シモク二人とは思えないわね・・・

「・・・イブール？」

「あ・・・ごめんなさい！・・・何だつたつけ？」

ラスリアの言葉で我に返ったイブールは、再び話を聞く体勢になる。

「えっと、大したことではないのだけれど・・・」

「？」

イブールは笑顔で首をかしげると、ラスリアは自分の首筋を押されながら口を開く。

「あなたの首に巻いているスカーフ（それ）・・・。暑くないの・・・？」

「・・・！」

その後、イブールの表情が凍りつく。

もちろん、こんな暑そうな状況でスカーフをはずさないのにはちゃんとした理由がある。それは、決して知られたくない「モノ」がスカーフの下に隠れているからだ。

・・・一緒に旅をする事になったとはいえ、まだこの子達には

この時、イブールの頭の中には今から6年前

16歳の時に起きた惨劇が浮かんでいた。

飛び散る血・・・穢された肉体・・・そして、現れる悪魔・・・。

彼女が

その出来事は、彼女にとつて絶対に思い出したくない過去。ましてや、出会つて間もないアレンやラスリアに話すことなどできるはずがない。

自分の過去に関わりがあつて首にスカーフを巻くイブール。それを知られたくないかった彼女は

「・・・首元にこのスカーフを巻いていないと、落ち着かないのよ！」

普段の笑顔に戻つて答える。

その表情を見た時、最初は驚いていたラスリアも、ホッとしたのか穏やかな表情に変わつたのだつた。

「・・・おい。そろそろ、アテレステンに馬車が着くぞ」イブールとラスリアの横からアレンがボソッと呟く。

「あら、本当？・・・じゃあ、降りる準備をしなきゃね・・・！」

アレン・・・ちょうど良いタイミングで、助かつたわ・・・これ以上、スカーフの話をしたくなかったので、この時出たアレンの台詞にイブールは救われたような感覚を持つた。

アテレステンに到着した彼らは、町の入り口で白い装束を渡される。

「なんだこりや・・・？」

「今日はライトリア教の祝典・・・。故に、この街を通る全ての人間が、象徴的な色である白い装束を身につけなければならないのだ」出入口にいた役人はそう言つていた。

「・・・つたく、なんで俺まで・・・」

渋々とミュルザは白装束を身につける。

確かに、悪魔であるミュルザにとつて宗教的なモノは堅苦しい以外の何者でもない。しかし、目立たないためにも、本人には我慢してもらひ他なかつたのだ。

「白装束があつて良かつた・・・」

「え・・・？」

ラスリアが小さな声で呴いていた台詞を、イブールはたまたま聞いていた。

チラツと見ると、ラスリアの表情<sup>かお</sup>がそわそわしていて、周囲を気にしているように見える。そんな彼女達の様子を横目で見ていたミユルザは、ふと変わった人間の気配を感じていた。

学術都市アテレステンに到着してから、アレンは周囲の空気が微妙なかんじになっているのを感じ取っていた。

ラスリアはなぜかソワソワし始めているし、イブールとミユルザ（紫野郎）も何か深刻<sup>かお</sup>そうな表情をしている……。一体、どうなっているのだか

アレンはフーッとため息をつく。

「ところで……」の都市で学者連中が集まる場所はどこだ……。  
？」

他の人間がどんな事を考へていようと、俺はただひたすら“イル”を探し出さなくてはならない……。探さなくてならない理由が自分でも理解できていないが、“本能的に”求めている……。というべきなのだろうか……。

ラスリア達を見回しながら、アレンは考える。

「そう……ね。じゃあ、私の知り合いがいる『ミユル』大学にでも行つてみましちゃうか……！」

「ミユル大学……？」

振り向くと、ラスリアが首をかしげながら、何の事かという表情をしている。

「ミユル大学は、この学術都市アテレステンで一番大きな大学なの。施設や学科の豊富さはもちろん、あの大学の図書館に眠る文献の数も半端じゃないの……」

「・・・なるほど。そこへ行けば、何かわかる・・・といふ事か？」

「・・・まあ、一応ね！」

白装束を身に着けたアレン達は、町の表通りを通り抜けながら歩く。行き行く人全てが白装束を身にまとっているため、アレンにとつては少し不快に感じる光景だつた。

「きやあつ！」

ドンという音と共に、ラスリアが誰かとぶつかつた。

「痛たたたた…」

ぶつかつた拍子に地面に座り込んでしまつたラスリアは、お尻を押さえる。

「君！・・・大丈夫かい？」

彼女に手を差し伸べたのは、白い甲冑を身にまとう一人の騎士だつた。

「あ、はい。大丈夫です・・・」

この騎士の手を取つて立ち上がつた時、兜から見える金色の瞳にラスリアはドキッとする。

「よかつた・・・。すまなかつたね。わたしがちゃんと前を見ていなかつたから・・・」

「いえ！私こそ・・・周囲ばかり見ていたから気がつかなくて・・・

顔が赤い状態で会話をするラスリアを見て、アレンはなぜか複雑な気分になつていた。

「それでは、お嬢さん。わたしは職務がござりますので、これにて失礼します！」

しつかりと敬礼をした後、甲冑を身にまとつた騎士はアレン達が来た方向へ歩いて行つた。

「彼、きっと仕事のできる男・・・つてかんじがするわね！」

「そうかあ？なんだか、いい所のお坊ちゃんつてかんじにも見えたが・・・」

アレンの横でイブールとミュルザが会話をする。

「…………」

何かを感じ取ったアレンは、その方向をギッと睨みつける。

「ニヤア――……」

振り向くと、アレンの田の前にいたのは1匹の黒猫だった。

・・・誰かの視線を感じたような気がしたが

去つて行く猫を見つめながら、“誰かに見られていたような感覚”を覚えるアレン。

「アレン・・・どうしたの？」

ラスリアの声が聴こえたと同時に、アレンは我に返る。

「・・・何もない。俺たちも行こう」

進行方向に向きなおしたアレンは、イブール達の下へ戻つて行く。

しかし、この通りにある建物の奥では・・・

「シャム。・・・ひ苦笑だつた」

先ほど、アレンが見かけた黒猫を撫でる。

そして、不適な笑みを浮かべながらこの男は呟く。

「・・・確かめる価値がありそうだな・・・」

## 第1-3話 アテレステンに到着して（後書き）

いかがでしたか。

お気づきの方もいるかと思いますが、伝承のような口調で始まる所があつたかと思います。

これには理由があつて、サブタイトルには表記してませんが、このタイプの文面は章の始めという意味で入れています。

特に、アレン編 セリエル編と切り替わった時や今回のとかはよく表れているかと思われます。

それ以外だと会話からであつたり、普通に物語が始まっているように書いています。

この”ガジエイレル”作品は、所々でこういった説明を入れたほうが良いと感じたので、今後も同じ手法で書いていきます。

さて、今回の章では、ヒロインであるラスリアの微妙な立場が良くわかる章となっています。

アレン達を後ろで見張っていた男の正体は・・・・・?

次回をお楽しみに

「意見・」感想をお待ちしています

## 第14話 教授との会話の中で

「すうい・・・まるで、宮殿みたいだわ・・・！」

感激の余り、声が出ないような表情<sup>かお</sup>でラスリアは辺りを見回す。学術都市アテレステンに存在するコミニーエ大学。都市の中で一番大規模と言われているだけあって、外から見ると本当に宮殿のような大きさだった。城壁を思わせるような門。学生達の話す声・・・・・。校舎内でも、とても開放的な雰囲気を持つ。

「そういえば、イブール姐さんは現役の学生だっけか？」  
何かを思い出したかのように尋ねてくるミユルザ。

「んー・・・1年ダブつてはいるけれど、大学院に入っているから・・・現役って所ね」

「専攻は、考古学・・・・と言つた所か？」

普段は他人の会話を静かに聴く事の多いアレンが、めずらしく会話に入ってくる。

大学院・・・・イブール（こいつ）からだつたら、マトモな情報が得られるかもな

ただし、アレンは純粹に“イル”の事が知りたいだけであった。

「アレンだつたらおそらく、図書館に行けばいろいろわかるかもしれないけど・・・その前に、私の用事を先に済ませてもいいかしら？」

「構わないが・・・なぜだ？」

「図書館はいつでも行けるし、閲覧だつたら大学の人間じゃなくても可能だしね。ただ、私の用事の方は・・・教授が帰る前に行かな  
いと、済ます事ができないから・・・・」

本当は一刻も早く図書館で調べ物をしたいが・・・それなら、仕  
方ないか・・・・・

自分の用事を優先させたかつたが、一歩留まる事にしたアレン。横

からラスリアの視線を感じたが、あまり気にしていなかつた。

「おや、『ご苦労だつたね。イブール君』

“イブールの用事”を済ませるために、アレン達は彼女の師であるロレリア・ハノバンド教授の研究室を訪れていた。

「お待たせしました、ロレリア教授。・・・これが、今回の遺跡探索に関するレポートです」

そう言つてイブールは、荷物の中から取り出した封筒を教授に渡す。ロレリア教授は、机の側に置いてあつた眼鏡をつけた後、イブールのレポートに目を通す。そして、紙をパラパラとめくつた後に口を開いた。

「これは、なかなか見ごたえがありそつじや・・・。後でじつくり読ませてもららうよ・・・」

「ありがとうございます、教授。よろしくお願ひ致します」

そつ言つて頭をぺこりと下げるイブールを見た教授は、せつなそうな表情で呟く。

「・・・あんな事さえなければ、君はわたしの助手になつていたのかもしぬないのにな・・・」

「??」

その台詞を聞いたアレンとラスリアはきょとんとした顔で教授を見る。

周囲に沈黙が走り、氣まずい雰囲気に変わる。

“あんな事”

この時、アレンは以前も思い浮かんだ“イブールの暗い過去”という言葉を思い出す。それについて教授は何かを知つているのかと疑い始めた矢先・・・・・

「ロレリア教授!!」

イブールの大きな声が響く。

突然声を張り上げたので、その場にいた全員が驚いていた。

「一つ、お伺いしたいのですが……」

「ん……ああ。何かね？」

呆気に撮られていた教授は、すぐに我に返つてイブールの方を見る。

「教授は……古代種“キロ”について……どう思われますか？この時にアレンが気がついていなかつたが、 “キロ” の言葉にラスリアがわずかに反応する。

「キロか……」

そう呟きながら考え事をする教授。

なぜ今、古代種の話を……？

アレンが不思議に思つていて、考え方をしていた教授の口が開く。  
「“素晴らしい”……の一言に及ぶるかな。考古学者の間ほかでも知られているようだ、星と対話できる能力や、魔術を作り出したその知識……。古代大戦さえなければ、彼らは今の世界をより良いモノに作り上げていただろううだ……」

「古代大戦……？」

その場にいた全員が、教授の話に釘付けになる。

「古代大戦とは、このレジヨンティラスの文明が滅びる原因となつた戦いの事。多くの学者がそれについて調べ、いろんな説が飛び交つてある……」

「……私が大学に入学した頃にも、学内の討論大会で討議されていましたね……」

イブールが腕を組みながら呟く。

「あの時は、多くの説で学者達は激しい討論であつた。文明が滅びたのは“自然災害が原因”であつたり、“魔物との戦い”が原因であつたり……」

「教授さんよ……。あんたはどう思つていたんだ……？」

“魔物との戦い”に反応したのか、ミコルザが会話に入つてくる。  
永い時を生きるミコルザ（こいつ）の事だ……。何か思うところもあるのか？

彼の台詞を聞いた時、アレンは内心でそう思つていた。

「・・・討論大会では少数派な意見だったが、私は古代大戦についてはこう思う。“8人の異端者”と、彼らを生み出してしまった人間の弱さが原因だと・・・」

「“8人の異端者”」

それを聴いたアレンの心臓が強く脈打ち始める。

「それは……どんな人達なんですか……？」

真剣な表情で話を聞いていたラスリアが、教授に問いかける。

わからん 徒生は一いつてはどの文蘭にも転じていなし 何かを  
発見した学者はいなからな・・・。ただ一つわかる事は、“8人  
の異端者”はそれぞれ違う民族の出身だったという事だけじや・・・。

「そう・・・ですか・・・」

残念そうな表情をするラスリア。

「これ以上、重い話をしていても仕方ない」と考えたのか、ロレリ

ア教授が立ち上がりつゝあると・・・

卷之三

アレンが頭を抱えて苦しみ始める。

「アレン……？」

おー・・・・君！－！

全身上に汗をかき苦しむアレンを見たラスリア・イフール・ロレリア教授が彼の元に来る。

その後ろでは、深刻な表情で彼らを見つめるニユルザ。

「ガアアアツ・・・・・！――！――！――！」

アチャシ・・・・

うめくような叫び声を上げたアレンはその直後、地面に倒れて気を失ってしまう。

アレンは遠のいてくる意識の中で、また一つの“ビジョン”を見て  
いた

アレン・・・大丈夫かな？

自分たちが口レリア教授と会話している途中、苦しみだしたかと思うと意識を失つてしまつたアレン。側で眠りについているアレンを見ながら、ラスリアは考える。

あれからイブールは口レリア教授と話がしたいといつのもあって、大学内にある学生食堂へ食事をしに行つた。ミュルザも「田の舎ぐ範囲にいる」と言つて出て行つてしまつた。

教授から留守番を頼まれて引き受けたけど・・・もしかしたら、気を使つてくれたのかな

ロレリア教授の研究室でアレンと一緒に残つたラスリアは、辺りを見回しながら思う。

「やつぱり、私は・・・」

思つていた事を何となく呟いたラスリア。

「私は・・・古代種“キロ”なのかも・・・」

小さな声で呟く。

室内は静かで、廊下から生徒の声すらも聞こえない状況だった。

そう考えれば、自分が生まれつき持つ能力にも説明がつく。もちろん、今までも「そうではないか？」とは考えていたものの、今回みたいに他人の見解がなかつたから絶対とは思えなかつた。しかし、ロレリア教授との会話で、自分が古代種の末裔である事を改めて認識する事になる。

「う・・・」

気がつくと、アレンがゆっくりと瞼を開いていた。

「アレン・・・大丈夫？」

意識の戻つた彼を見て、ラスリアは優しく声をかける。

「ああ・・・それより、一体何が・・・？」

「あ・・・あのね・・・」

目が覚めたばかりで眠そうな表情をするアレンを見て、ラスリアは頬を少し赤らめる。

その後、アレンが倒れる直前の出来事を彼に話した。

「あの時はいっぴいっぴだつたが……そんな事になつてたとは……」

少し落ち着いてきたのか、上半身だけ起こしてアレンは咳く。

「ここだけの話だが……」

「ん……？」

アレンが意識を取り戻したので、ミュルザ辺りでも呼びに行こうかと考えた矢先、彼が口を開く。

「俺は……あの教授が言つていた“8人の異端者”……の説が一番有力なのではと思っている……」

「……何か根拠もあるの？」

きょとんとしたラスリアは首をかしげながら彼を見る。

「……いや。単なる直感と言つた所か……」

「ブツ」

その台詞を聞いた途端、ラスリアが思わず笑う。

「……今、嗤つたな……！？」

笑われた事を不快に感じたアレンは、物凄い形相でラスリアを睨む。

それに対してラスリアは、笑いを必死でこらえながら口を開く。

「いや……だって、そんな真顔で「直感だ」なんて言つから……」

・

「悪いか」

「ううん……。ただ、貴方は“冷静に現実を見る人”ってイメージが強かつたから……」

それを聞いたアレンは、不満そうな表情かおで首をかしげていた。

普段あまり見せないアレンの態度に、ラスリアは新鮮さを感じていたのだった。

「キヤアアアアアアアアアツ…………！」

扉の向こうで、物凄い悲鳴が聞こえる。

「えつ・・・・・・・・！」

何が起きたのかと、ラスリアは研究室の扉を開ける。すると、廊下では生徒や教師がバタバタとしていた。

「アレン・・・私、何が起きたのか見てくるわ・・・・・！」

「あ、ああ・・・・」

研究室にアレンを一人残したラスリアは、悲鳴の聞こえた方へと走り出す。

向かった先では、何か恐ろしいモノを見たような表情で逃げ回る学生たち。

「何があつたんですか・・・・！」

ちょうどすれ違った男子生徒に、ラスリアは何が起きたのかを尋ねる。

「だ・・・校舎内に・・・突然、魔物が現れたんだ・・・・・！」怯えた表情で応えた生徒は、ラスリアを振り切つて走り去ってしまう。

一体なぜ、大学内に魔物が

突然の出来事に、少し混乱していく。

「あれは・・・・・！」

向かった先にある中庭には、校舎の天井を破りそくなくらい巨大で、右手にこん棒を持つ“トロル”がいたのであった

## 第14話 教授との会話の中で（後書き）

いかがでしたか。

”古代大戦”について補足ですが、この”レジヨンティラス”は大戦によって一度文明が滅び、また文明が発達し始めたという次第です。

なので、この戦いが起きるまでは2つの世界は1つだったという設定になっています。ただ、アレン編に出てくる人々は、誰もこの設定を知らないという事にしています。

それと、”8人の異端者”についてはセリエル編を読んで戴ければおわかり戴けると思いますので、お時間ある時にでもどうぞ

【ミュー】大学内に突然現れたトロル。

平和な場所に、なぜ魔物が・・・・・！？

ご意見・ご感想、それと評価の方もお待ちしています（^ ^

## 第15話 治癒魔法（前書き）

＜前回までのあらすじ＞

アレン達は”イル”の手がかりを求めて、学術都市アテレスデンにあるコミニューニ大学を訪れていた。

イブールの師でもあるロレリア教授との会話中、突如意識を失つてしまふアレン。

その後、アレンを介抱していたラスリアだつたが、研究室の外から悲鳴が聞こえ・・・

## 第15話 治癒魔法

「さやあああああああつ！……」

「逃げろおおつ！……！」

「ミュー二大学内に突如現れてたトロル。

周囲にいた大学関係者は、皆パニックになっていた。

ドガアアアン！！！

トロルが棍棒を一振りしただけで、中庭にあつた銅像が粉々に砕けてしまふ。

どうして、こんな所に魔物が

そう考へているや否や、トロルの青白い瞳がこぢりく向ぐ。

「あれ・・・・・？」

魔物を正面で見たとき、ラスリアは首をかしげながら違和感を感じる。

トロルは本来、知能が低いつて聞いたことあつたけど……。あれは、まるで……。

「そこのお嬢さん！下がりなさい……！」

すると、田の前に甲冑を身にまとつた兵士が何人か現れる。おそらく、国の兵士であろう。

「は……」

少しずつ後ろに下がるラスリア。

「この……なんで、ミュー二大学に魔物が……？」

「とにかく、こいつを倒すぞ！……」

そう叫びながら、この4人の兵士達がトロルに立ち向かう。すると、魔物は近傍を持った左手を思いつきり振り回す。

「ぐわああつ！！！」

「ぎやああああつ！……！」

剣を持つて立ち向かう彼らだが、トロルの一撃でそれぞれが壁

に吹き飛ばされてしまう。

なんていう怪力（力）……………！

トロルの馬鹿力を目の当たりにしたラスリアは、つばを「クリ」と飲み込む。

— ! ! ! !

気がつくと、トロルがラスリアの田の前まで移動していく。しかも腕を振り上げていた。

物凄い轟音と共に振り下される棍棒

入る。

黑髮 女

一  
え  
・  
・  
・  
?

アリヤがわざと咳をしていふ

一  
ヰ  
・  
・  
・  
・  
口  
の  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
未  
・  
・  
・  
・  
裔  
・  
・  
・  
・  
」

— ! ! ! !

おれが、ここへの狙いは……・私……・!!??

本能的に「逃げなくては」と感じ取ったテスリア。しかし、先ほど  
の攻撃を避けてから床に座り込んでしまい、彼女の足がガクガクと  
震えていた。

足が動かない。・・・・どうして！？

りと彼女に近づいてくる。

いや・・・誰か・・・助けて・・・！

怖くて声が出なくなつてゐるラスリアは心の中で叫ぶ。トロルが腕を振り上げ、彼女に手を出そうとした瞬間・・・

「ラスリア！！！！！」

彼女の名前を呼ぶ声が聞こえる。

ドガアアアアン！！！

物凄い音が周囲に響いたが、ラスリアは自分を誰かが抱きかかえているのに気がつく。

視線を上にすらすと、銀色の髪が彼女の頬に触れる。そこにいたのは、息切れしながらラスリアを抱きかかえるアレンの姿があった。

ラスリアがトロルを確認する数分前・・・

「一体、何が・・・」

ラスリアが研究室を出て行つた後、ボソッと呟きながら立ち上がるうとするアレン。

「つ・・・・・！」

立ち上がった瞬間、少しだけ眩暈に襲われる。

貧血・・・ではないはずだが、何だか気持ち悪い気分だ・・・

顔が真っ青になつていたモノの、何とか外に出ようと試みる。すると

「アレン！生きてつか！？」

「お前・・・」

なぜか窓際に、ミュルザが立つていた。

「一体、外で何が・・・？」

頭を抱えながら話すアレンにミュルザは言つ。

「・・・問題なさそうだな」

「！？」

「・・・よく聞け、アレン。どういうわけだか、この大학교舎内に魔物が現れた」

「何！？」

“魔物”の言葉を聞いたとたん、ガバット身を乗り出すアレン。

「早く倒さねば・・・！！！」

大학교舎内のため、当然魔法を使うことは許されない。だから、尚

更、剣などの打撃で倒さなければならぬ。

一刻も早く向かおうとするアレンに、ミュルザが軽く制止する。

「お前なら気がついているかもしけんが……この大学に、俺みた  
いな異質な存在がもう一人いる……」

「何・・・だと・・・・?」

悪魔みたいな異質な存在・・・・?

何のことかとアレンは考えていると

「あーもー、思考ストップ!!とにかく、俺はその“異質な存在”  
を確かめてくるから、お前はラスリアのところにでも行つてやれ……  
・!・!・!」

そういうたやり取りがあつて、現在に至る。

「ラスリア!!!!

大学の校舎内を走り回つていると、魔物に襲われているラスリアを  
発見する。

彼女を抱えて逃げた事で、魔物の攻撃から助け出すことはできたが、  
寝起きの運動がきつかったのか、息切れをしているアレン。少し落  
ち着かせた後、口を開く。

「・・・・大丈夫か?」

「ええ・・・大丈夫よ!」

苦笑いでそう頷く。

気丈な表情をしていたラスリアだったが、手が微かに震えていた。

本当は怖いはずなのに、無理しやがつて・・・

表情は笑顔なのに、内心は怖がつてゐるラスリアを見て、なぜか「  
守らなくては」という想いに駆られる。

なんだ・・・このかんじは・・・・!?!?

「人を守りたいという気持ち」を知らなかつたアレンにとって、こ  
の想いは生まれて初めてのモノであつた。

「・・・お前は下がつてくれ」

トロルから少し離れた場所でラスリアを下ろしながら、アレンは低

い声で呟く。

「・・・・・！」

ラスリアを庇うようにして抱きかかえたせいか、魔物の攻撃が少し掠つたようだ。

「アレン・・・腕・・・」

ラスリアが、血の出ているアレンの一の腕に視線を向ける。

「ああ、これか・・・。全く問題はない・・・」

棍棒の先っぽが当たったのか、少しだけ痛む一の腕。

「でも、戦っているうちに骨が・・・なんて事になつたら、取り返しがつかないし・・・」

そう呟いたラスリアは、怪我をしている方の腕を掴む。

パアアアアツ・・・

ラスリアがその黒い瞳を閉じたかと思うと、彼女の手が光りだす。

「これは・・・」

気がつくと、傷口<sup>キュア</sup>がみるみると塞<sup>キュア</sup>がつっていく。

これは・・・治癒魔法・・・・・・！？

どんな魔法かは知っていたものの、初めて目にした治癒魔法<sup>キュア</sup>に対し、アレンは驚きを隠すことができなかつた。そして、一の腕に負つた傷は、あつという間に治つてしまつた。

「助けてくれてありがとう、アレン！」

「あ・・・・・ああ・・・・・」

このとき、柔らかい笑顔で礼を言つてきたラスリアに、アレンは少しドキッとする。

『気を取り直して、トロルに剣を向けるアレン。

ガキイイイン！？！

彼の剣とトロルの棍棒が当たつたとき、耳を塞ぎたくなるような音が中庭に響く。

幸い、トロルは怪力が取り柄の魔物で動きも鈍いため、この後はあまり苦戦することなく倒すことができた。

アレンはこの時に戦っていたから気がついていなかつたが、この時、物陰から彼とラスリアのやり取りを眺めている人間がいた。

「“あれ”が言つていた通りだ。・・・あの娘は、やはり・・・」

独り言をつぶやきながら、ほくそえむ男。

その片手にはトロルが封印されていた本がある。そして、魔物が倒されたのを確認した男は生徒たちのいる方へ去つていくのだつた

## 第15話 治癒魔法（後書き）

いかがでしたか。

この回を読まれた事で、ラスリアが古代種族「キロ」である事はすぐわかると思います。

しかし、まだアレン達には教えていないので、知っているのはラスリア本人と、この作品をお読みになつている皆様のみです。私は”既にわかりきつて”いるけど、登場人物たちには知られていな”い”という書き方がこれからも多い”と思いますが、よろしくお願ひします！

ご意見・ご感想、そして評価の方をお待ちしています！！  
たくさんの方にお読みいただければ幸いです

## 第16話 天使と悪魔（前書き）

今回は、ミユルザの視点からスタートです。

## 第16話 天使と悪魔

“異質な存在”

自分の事をそう言つた表現で口にしたとき、何か変なかんじがした。俺・・・ミュルザは、イブールという魔術師と行動を共にする悪魔。異質といえば確かにそうだが、自身に対してもういった価値観を持つことはなかった。

研究室で倒れていたアレンをラスリアの元へ行くよう促した後、人間には見えないくらいの速さで、『ミュー』大学の校舎を走り回るミュルザ。

この建物に入つてから、妙な気配を感じていたが・・・今は、はつきりと感じる・・・。魔物が現れたのも、もしかしたらそいつらの仕業かも

走り回りながら考え方をする。

「――――」

何かに身体が反応したのか、その場に立ち止まるミュルザ。  
立ち止まつた場所は、生徒があまり使わなそうな階段だった。  
「・・・コソコソしてないで、さつさと出てくるんだな」  
そう咳いて上を見上げるミュルザの瞳は、血のように真っ赤であった。

これは、悪魔が敵に対して威嚇行動を取つたり、特殊能力を使う際に起ころる現象である。すると、カツンカツン・・・という靴の音と共に水色の髪色をした女性が現れ、ミュルザの方に視線を持つていく。

「人間界で、お前のような奴を見かけるのは・・・初めてだな・・・」  
「・・・それは、こちらの台詞です」

その後、ミュルザからは黒い翼が。そして、水色の髪を持つ女性

の背中からは白い羽が現れる。

「・・・・なんで、“天使サマ”が人間の味方をする！？」

「そういう貴方こそ・・・悪魔のくせに、随分とあの女性に入れ込んでいるようだけれど・・・？」

ミュルザが“天使”と述べる女性は、彼の質問に質問で返してきた。天使 文字通り、“天の使い”である白い羽を持った種族。“神の使い”とも言われるが、ここで言つ“神”は天地創造をした存在ではない。ただ“自分が唯一絶対の存在である”という歪んだ考えしか持たない生命体の事を指す。

「・・・雑魚の魂を貪るのには飽きてしまったからな。・・・お楽しみは最後に取つておいているだけさ・・・！」

そう語るミュルザの表情は狂気に満ちていた。

「くだらないわね・・・」

「そういうてめえの方こそ！！」

天使がボソッと呟いた直後、反論するかのように叫ぶミュルザ。

「使い魔を利用して、俺達を後ろから尾行していた野郎・・・。あれがお前のご主人様だろう？・・・どう見ても精神がいかれていくそ<sup>あんた</sup>うな奴なのに、不浄を嫌う天使が従うなんて、反吐が出るね・・・！」

「！」

馬鹿にするような表情で、ミュルザは相手を皮肉る。

彼らの間に緊迫した空気が流れる。天使と悪魔は、古代より争いが絶えず、永きに渡つて対立している関係。相容れない存在なのだ。

「・・・私はただ、“命令”で動いているだけ。それさえなければ、あんな汚らわしい男に力を貸したりしないわ

真剣な表情で、その女性は述べる。

彼女の髪が少し揺れた時、前髪の隙間から何か痣のようなモノがちらりと見える。それを見逃していなかつたミュルザが、首をかしげながら口を開く。

「あなたの額にある刺青・・・。それって確か・・・？」

「！――！」

彼の台詞を聞いたとたん、女性の顔色が激変する。

「ここは、人間が多くいる場所……。あの男の事もあるから今日はここで退散するけど、次に会った時は容赦しないから……！」

「あ……おい……！」

翼を羽ばたかせる音が一瞬聽こえたかと思つと、ミコルザの頭上に先ほどの天使はいなくなつていた。

奴の額にあつた刺青……あれは確か、墮天使の刻印自分が持つ黒い翼を収めたミコルザは、あの墮天使がなぜ人間の味方をしているのかを考えながら、アレン達のいる方向へ歩き出す。

「おー！イブール姉さん！？」

イブールの気配をたどつて進んだミコルザ。

そこにはアレンやラスリア。そして、ロレリア教授もいた。

「ミコルザ……あんたつてば、今までどこにいたのよ！？」

いつもと変わらぬ態度で、イブールの怒号が飛んでくる。

「悪い悪い！……ちょっと、町中をうろついてたもんで……」

とりあえず、いつもの軽い口調で受け流そうとするミコルザ。

「イブール主には、後で話しておかなくてはな……」

笑顔で会話する一方、内心はそう思つていた。

「あー……ゴホン！？」

気がつくと、わざとらしく咳払いをしているロレリア教授<sup>おつかさん</sup>が自分たちの横に立つていた。

「あ……『めんなさい、教授』

「いや、構わないのだが……わたしは講義もあるので、ここいらで失礼するよ」

そう言つて、ソソクサと退散していった。

・・・どうやら、寂しがりやのおっさんみたいだな……

歩いていくロレリア教授を見て、ミコルザは思う。彼は普通の人間の心が読めるため、どんな言葉を発しようとも、嘘か真実かは手に

とるようになる。

「さて……と。私の用事も終わった事だし、アレンの用事を済ませましょうか！」

「……頼む」

アレンとイブールの会話が終わった後、“イル”に関する情報を調べるために、大学内にある図書館へ向かい始めた。ラスリアとイブールは女同士で他愛もない会話をしながら進み、アレンとミコルザは黙つたまま進んでいた。

…野郎と2人で歩く趣味はねえが、女2人の会話に割り込む気はなれねえな…。

アレンをチラツと見ながら、ミコルザは考える。

「おい…」

「…なんだ？」

アレンの方から話しかけてきたので、一瞬、惑つミコルザ。

すると、アレンは低い声で話し始める。

「あんたは…”イル”の事、本当は何か知っているんじゃないのか？」

その台詞を聞いたミコルザは一瞬黙る。  
しかし、思い出したかのように話し出す。

「確かに…俺は人間（お前ら）より長く生きているから、いろいろな事を知っている。…しかし、”星の意思”に関する事だけは、何も知らないな…」

そもそも、悪魔は”星の意思”については関わりうとしねえから

アレンに告げた後、一瞬だけそう考えた。

「ついでに言っておくと、俺はあんたの心だけは読めない」

「…どういう事だ？」

ミコルザの台詞に、アレンの表情が険しくなる。

「そのままの意味だよ！俺が言うのもあれだが、お前も人間じゃな

い”何か”かもな…」

「そうか…」

その後、2人にまた沈黙が訪れる。

悪魔が心を読める生き物というのは、太古の記憶によりある程度知つてゐる奴らばかり…。アレン（こいつ）のように心の読めない生き物つていうのは、相当やっかいな連中…って事になるのかもな

歩きながらミュルザはそんな事を考えていた。

図書館に向かう途中で私はラスリアと普通に会話をしていたけれど、他人に興味を持たないミュルザと、割と無愛想なかんじのアレンが2人で会話をするなんてめずらしいな…

図書館に到着後、本を物色しながらイブールは考える。

図書館に到着したイブール達は、「ここでは一般人も本の閲覧ができる」とアレンやラスリアに告げ、各自調べ物を開始していた。本棚越しに見えるアレンとラスリアを見ると、2人は違う本棚を眺めている。アレンはいつもと変わらず無表情だが、ラスリアの表情は冴えない。

何があつたのかは知らないけど、魔物<sup>トロル</sup>に襲われたりすれば、普通は沈むわよね…

今はそつとしておこう」と思ったイブールは、星命学関係の本を探し始める。すると…

「イブール姐さん」

「あら、ミュルザ…どうしたの？」

隣にミュルザが来て、彼女に声をかける。

「ちょっと、話が…」

その後、イブールとミュルザは図書館近くにある人気のない場所

へ行つた。

「話つて何？」

移動中、いつもは何かしら話しかけてくるニコルザが黙つたままだつたので、到着後、イブールはすぐに話を切り出す。

「…この校舎内に魔物が出没していた時、俺は珍しい奴を見た」

「え…？」

急に真剣な表情をして話しだしたので、イブールはドキッとした。  
「”珍しい奴”なんて言葉、あんたが使うのも変なかんじだけど…なんだったの？」

「…天使だ」

「…は…！…？」

あまりに予想外の言葉に、イブールはつい声を張り上げてしまう。その後、イブールは声量を小さくして話す。

「…まあ、悪魔あんたみたいな生き物がいるのだから、天使がいても不思議ではないけれど…。でも、なんでまたコミュー二大学（こんな所）に…？」

星命学を勉強するイブールの周囲には型破りな思想を持つ人が多かつたため、この突拍子のない話に対し、すぐに理解を示す事ができた。もっとも、悪魔と”契約”をしている時点で、イブールは普通の人間とは異なる人生を歩んでいるわけだが

「どうやら、天使も俺と同じように、とある人間についてるみたいだ。…奴の目的はわからなそいついが、本題はそいつではなく、そいつが味方をしている人間のほうだ」  
「天使が側にいるくらいだから…そいつも”特殊な人間”って所かしら…」

イブールが腕を組みながら考え込む。

「…その人間は、おそらくラスリアを狙つている」

「え…」

ラスリアの名前が出たとたん、イブールの表情が凍りつく。

だが、イブールはチラッとミュルザの顔を見る。彼の表情が深刻になつてゐるのが、見てすぐに気がついた。

「”おそらく”…なんて、あんたらしくない曖昧な表現ね？」

「…多分、あの天使が周りをうろついているから、考へてゐる事が読みづらいんだろ？」

イブールの台詞に、ミュルザは皮肉つてゐるような口調で答えた。

その後、ミュルザは一息ついた所で会話を再開する。

「ラスリアちゃん…。彼女は古代種”キロ”の生き残りだ」

「…そういう事…」

”ラスリアが狙われている”という事実がわかつたとき、「なぜ彼女か」と疑問に思つてゐた。しかし、絶滅したと思われてゐる古代種であるのなら、納得ができる…。イブールはそんな表情をしていた。

「…という事は、その男…ライトリア教の関係者というかんじね…」

「ライトリア教ね…」

そう言つて、ミュルザは鼻で晒つ。

しかし、そんなちょっとした仕草に対して、イブールは氣にも留めていなかつた。

星命学を元にした宗教であるライトリア教における古代種”キロ”は、”星を切り開く民”として、教団の中で神聖視されている存在である。しかし、古代大戦によつてその数が激減。彼らを味方につければ、世界の発展と共に教団の権威も強くなる

教えとは裏腹に、そういう野望を持つ彼らがキロの生き残りを探すのに対し、躍起になつてゐるのをイブールは知つていた。

「ここ周辺は兵士共が目を光らせてゐるから大丈夫だろうが、これからは注意してやつた方がいいかもな」

「…軽い気持ちでの子達を選んだのに、どうやらす”いのに当たつてしまつたようね…」

イブールが頭を抱えながら、ため息をついた。

すると、ミュルザは彼女の耳元でささやく。

「…だが、あいつらみたいな連中と旅した方が、”目的の奴”に早

く逢えるかもしないぜ……？」

「……」

「人間つて奴は、特異な存在同士だと惹かれあうようにできている。俺がお前の魂を頂戴する日も、近くなりそうだな……」

そう呟くと、ミユルザの唇がイブールの首元に触れる。

「私は、”奴”を見つけて殺すまで、絶対死ぬわけにはいかない。両親を殺した奴を見つけるまでは……！」

ミユルザがイブールの身体に触れている一方で、彼女の瞳は憎悪に満ちていたのだった。

## 第16話 天使と悪魔（後書き）

いかがでしたか。

初期設定でのイブールとミュルザの関係はこんなモノではなかつたのですが、ミュルザを”悪魔”という設定にしたらこんな風になつちゃいました（苦笑）

でも、主人公のアレンとラスリアのペアが純な雰囲気なので、対照的で良いかなとも思います。

話についてですが、イブール・ミュルザペアはラスリアが古代種の末裔である事を知りましたが、本人はまだアレンにだけは話していません。

次回以降では、最後の主要キャラであるチャスが登場していく事になりますが、彼らの関係はどうなるのか！？

次回はセリエル編となりますのでよろしく！  
ご意見・ご感想をお待ちしております！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7353p/>

---

ガジェイレル-Both-

2011年10月6日17時51分発行